
凡人魔王様の苦難の日々

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人魔王様の苦難の日々

【Nコード】

N9735A

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

元『魔王の日々〜現代版〜』です。タイトル変更しました。正義に憧れる子ども達の中、純粋な悪に憧れる少年がいた。彼は夢を問われると必ず世界征服と断言し、将来を問われるといつも政治家になると豪語していた。少年は心に悪への憧れを秘めたまま成長していき、憧れの悪の存在、魔王に相成った。しかし、彼を待っていたのは理想の悪とは程遠い、偽善的な雑用の数々だった……。現在、更新停止中……

プロローグ（前書き）

本当にプロローグだけです。第一話からが本当のスタートです。

プロローグ

あつ、皆さんこんにちは。僕は滝川朋。高校一年生と魔王をやっています。

えっ？

魔王なんて現代日本にいないはずがなくて？

皆さん、それは誤解です。大人達の野望です。政治家の横暴です。国家権力の陰謀なんです。

ですから、現実には魔王はいます。まあ、皆さんのイメージとは遠くかけ離れていて、例えるなら『真冬の朝のしつかりと冷えた麦茶』と『真夏の昼の熱々の牛乳』くらい違うんです。……違うんでしょうか？ あまり変わらないような気がしないでもないですが、まあ気にしないでください。

兎に角、僕は魔王の日常と仕事を皆さんにどうしても伝えたいんです。そして僕の次の犠牲……ごほん、もとい次の魔王になって下さる方が現れることを切に願っています。ちなみに月給は僕で30万円です。僕は魔王業を受け継いだばかりの上、サボり癖が酷いのでこの値段ですが、先代は月給100万は行っていたらしいです。……全国指名手配犯になっていました。更に今なら漏れなく魔王マントと魔王の鎧、魔王の高笑いのスキルがついてきます。凄いいお得かもしれません。

もしもこの物語を読んで魔王になりたいという方が居りましたなら、今すぐ僕に連絡してください。魔王は逃げも隠れもしますし、沢山の強くて薄情な仲間があなたの前に立ちはだかるでしょうが、まあなんとかなるでしょう。

長々と書きましたが、前置きはこれで終わりです。これから僕の素晴らしい魔王ライフが語られるかと思われます。皆さん、どうぞ楽しんで行ってください。

第一話 遅刻な朝と化け黒猫（前書き）

物語の導入の為、あんまり笑いが無いかも知れません。

第一話 遅刻な朝と化け黒猫

僕は海とも空ともつかないどこまでも広がる青の中を漂っている。世界が自分を残して全て消えてしまったような錯覚。漠然と寂しい気もするが、世界征服には好都合だと僕は笑い、どこまでも漂って……。

『ほら、もう朝ですよ魔王様！ 早く目をお覚ましく下さい！！』

突然と世界を揺らす大音声。あまりのうるささに僕は寝返りを打った。

もつとこの朝の気持ちいいまどろみを噛み締めていたいんだよ。そんな僕の気持ちはお構いなし。僕を目覚めさせようとする存在は容赦なく怒鳴る。

「魔王様、遅刻しますよ！」

「……………」

僕は眉間に皺をよせて声に背を向けるようにもう一度寝返りを打った。

まだまだ寝たりねえんです。本当勘弁してください。

「やはり強行策しかありませんか……………」

声は残念そうに、しかしそれ以上に嬉しそうに呟いた。何か、いやな予感が……………。

「起きなさい、魔王様」

「痛つつっ!？」

右頬に走る激痛に、僕は文字通り飛び起きてしまった。直ぐに右頬に手を当てる。

「三本の筋………？」

前にもこんなことがあったような、気がする。それも結構最近。むしろ一週間程前。

痛みに顔をしかめている僕の膝の上に、その痛みの元凶である黒猫が飛び乗った。右前足の爪は飛び出したまま。

「ようやく目を覚ましましたか」

「誰かさんのおかげで最悪の目覚めだけどね………」

「それは結構」

皮肉のつもりで放った言葉を黒猫は軽くかわして、僕の膝から飛び降りた。

「では魔王様、私は食堂でお待ちしております」

黒猫は颯爽と僕の寝室を後にしていった。くそう、恨み言の一つでも言ってやれば良かった。

あの黒猫の名は、アルベルト・レインブラック。呼び名は大体アルで定着している。スラッとした細い体躯にぴんと伸びた尻尾、黒く光沢のある毛並みはどことなく高貴な雰囲気醸し出していた。それもそのはず、彼は昔から魔王を補佐している猫又と呼ばれる存在で、由緒正しい悪猫なのだ。

僕は覚めきった目を時計に向けた。時刻は7時丁度。まあとりあえずは、血のにじんだ傷口を洗いに行こう。僕は寝間着のまま洗面所へと向かって行った。

「これはまたやってくれやがったねえ……………」

僕は鏡の中の自分とにらめっこしている。

鏡の中には年齢の割に幼い僕の顔。その右頬にはさつきつけられた大きなひっかき傷。

「これ、消えないだろうなあ……………」

僕は大きくため息をついた。僕の友人達に笑われてしまう。朝起きなくて猫にひっかかれたなんて言えるはずもないし。

「良いんじゃないでしょうか？ ほったの切り傷は悪党のシンボルですよ？」

僕の背後に唐突に現れたアルはさも愉快そうに言った。この猫、本気で皮はぎ取って毛皮にして売り払ってやろうか？

「ああ、でも魔王様のような童顔では野良猫と喧嘩したようにしか見えませんよねえ？」

アルは声を上げて笑っている。

うん、決めた。アルは毛皮にして売り払ってしまおう。そのお金で有能な代わりの補佐役を雇おう。

僕は口の端を思い切り吊り上げて笑みを形作る。

「ねえ、アル。苦しむのと、一瞬で済むの、眠るのとじゃあ、どれがいいかな？」

「えっ？ 私は眠るのが一番……」

アルは僕のただならぬ空気を読んだのだろう、言葉を切ってすぐさま飛び退いた。一瞬後、僕の蹴りがアルの居たところを通過する。その手加減の欠片もない攻撃にアルは震え上がった。

「な、何するんですか！ 今のが当たったらいくら私でも怪我しますよ！？」

「そうだね。君がちょっと調子に乗ってるから、殺してお金にしようかなーって」

冗談の欠片もない僕の本気の怒り。アルはそれを感じ取って2、3歩後退りする。

「あの、たちの悪い冗談はやめにしませんか？ 私は由緒正しい優秀な悪猫、つまり魔王のマスコットですよ？」

「冗談で僕がこんなに怒ると思う？ それに君が優秀なのは、人の神経逆撫ですることだけだよ」

アルの後退りに合わせて僕も2、3歩踏み出した。僕には分からないが、こういう時の僕の顔は満面の笑顔になるらしい。

アルは引きつった笑いを浮かべて、いきなりべたりと床に張り付き額を地面にこすりつけた。

「すみませんでした！ 私は本当に調子に乗っていたようです。どうかお許しを……」

僕はアルの土下座を見て満足して頷き微笑んだ。

自分の非を認めて謝ることが出来ない人間に生きる価値はない。逆に言えば、どんなに最悪な人間でも素直に謝ることが出来るのな

らそれだけで生きる価値がある。それが僕の悪党の美学の一つ。

「そう、最初からそうすれば良かったんだよ。そうすれば僕もこんなに怒らないよ」

僕の優しい言葉にアルはゆっくりと顔を上げる。その瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「魔王様……、やはりあなた様こそ魔王に相応しい……。私はあなた様を見つけられて嬉しゅう御座います……」

アルは目を輝かせて僕を見つめている。そんなに尊敬の眼差しを向けないでほしい。僕はありふれた悪党の美学に従っているだけなのだから。しかし、悪の頂点として崇拝されているのはそれ程悪くはない。

「僕がどう魔王らしいのか分からないけれど……。まあいいや。

お腹も空いたし朝食にしようか」

「あの、そのことで真に申し上げにくいことがあるのですが……」

「？」

「もう8時を回っております」

「嘘っ!？」

懷から懷中時計を素早く取り出し、文字盤を睨み付ける。短針は8の字を過ぎ去り、長針はもうじき2を指そうとしていた……。

「ち、遅刻ーっ!ー!」

そうして僕の慌ただしい日常の朝食は遙か彼方に連れ去られ、僕の成長がまた遅れるのだった……。ってそんな感傷に浸っている場

合じゃなかった！ 早く着替えないと！！

慌ただしく着替えて慌ただしく顔を洗って、僕は空腹のまま玄関を出た。空は青く澄み渡り、綺麗な秋晴れとなっている。

「じゃあ、行ってくるよ」

僕は見送りに出て来たアルに声をかけて、今さっきまで居た屋敷を見上げる。

通称、幽霊屋敷。壁の至る所に蔦が巻き付いた巨大な洋館は、近所の子供達どころか大人にまで恐れられている。まあ、実際に化け猫が出るからあながち間違いとも言えないけど。他にも2人程化け者が住んでいたりするし。

僕はそんなことを考えながらちらりと黒猫を一瞥した。アルは可愛いらしく首を傾げる。

「何かございましたか？」

「ううん、何でもないよ」

そうしていれば本当に可愛いただの猫なのね。

「まあ、貴方が何を考えているか興味はあるのですが今は時間がありません。とりあえずはお見送りだけにしておきましょう。行ったらっしやいませ」

「うん。いつも通り5時には帰るよ」

黒猫にそう返して僕は学校へ足に向けたのだった。はてさて、今日はどんな1日になるのやら。

第一話 遅刻な朝と化け黒猫（後書き）

次回、学校の話に続きます。

第二話 魔王様とへたれヴァンパイア（前書き）

すみません。実は学校編に入る前に色々やることができました。しばらくは主要キャラを増やして行くための話になります。

第二話 魔王様とへたれヴァンパイア

空が赤く焼ける頃、学校の授業が全て終了し特に部活動にも所属していない僕は帰宅の途についていた。魔王の仕事の無い平凡な日々。それは魔王になるまでは唾棄すべき退屈であった。しかし今では気の休まる大切な休日となっていた。

「まあ、いつ仕事があるか分からないから早く帰らないといけなんだけどね……」

僕は誰にとも無く呟きつつ、とぼとぼと家路に行く。本当は幽霊屋敷に帰りたくなんか無いのだけれど。

地面に転がっている石を数えながら歩いていると、突然の着信音。僕は急いでポケットから携帯を取り出して通話ボタンを押した。

「もしもし」

『魔王様！ 大変です！』

携帯の向こうからの声は、今一番聞きたくなかった黒猫の声。僕は電話を切ろうかと指を伸ばす。

「うん、大変だね。それじゃ」

『ちょっと！ 何切ろうとしてるんですか！！ 仕事ですよ、し・ご・と！』

アルは必死に僕に訴えかけている。まあ、ここまで真剣な声だと僕も聞かざるをえない。……嫌だけれど。

「しょうがないなあ。で、仕事って何？」

まあ、また魔に属する者の救済とかその類だろうけどね。

『はい。歓楽街からSOSの電話が……』

「それってもしかして……」

僕は嫌な予感がした。確か3ヶ月前の初仕事から7回位同じパターンの仕事があったような……。というか奴に違いない。アルも声のトーンを一つ下げた。

『その予想で間違い無いかと』

「見捨てちゃ駄目かな？」

『駄目です！ あれでも戦力にはなるんですから！！』

「戦力って言ったって、世界征服させてくれないんでしょ？」

『当然です！ 魔王様の仕事は魔を保護し、存続させ繁栄させることなんですから！！』

アルの言葉に僕は大きく溜め息をついた。

僕がやりたかったのは悪。正義との戦い。そしてその先にある世界征服なのだ。断じて歓楽街で死にかけているようなヘタレの保護ではない。

「僕は世界征服出来るって、正真正銘の悪の親玉になれるっていうから魔王になったんだよ？ あのヘタレを助ける義理なんて無いね」

『くっ……。じゃあ戦力が揃ったら世界征服でも何でもやらせてあげますから、今は取りあえずあのヘタレを助けてあげてください！』

アルの言葉を聞いた僕はにんまりと邪悪な笑みを浮かべた。

「その言葉、忘れないでね？」

『分かりましたよ。あ、今回は私、行けませんから。では』
「え、ちよっ……」

アルは死刑宣告に似た言葉を残して電話を切りやがった。何てことだろう。僕はあの我が儘なヘタレを一人で相手しなければならぬのか……。

「後の二人は旅行中だしなあ」

実質、戦力は自分一人。不安だ。

「あんの黒猫の右髭だけ切り落としてやろうか……」

猫はぴょんと伸びているあの左右3本の髭でバランスを取っていると聞いたことがある。どうなるか少し楽しみだ。

「さて、テンションも上がってきたことだし、歓楽街に向かいますか……」

僕は自分の年齢では絶対に足を踏み入れられない筈の大人な世界へと向かうのだった。

妖しいピンク色の看板が並び、どこか甘ったるい香りのする女が男を誘い、スーツで身を固めた軽そうな男が女を口説く街。その往来のど真ん中で、長い銀髪を一つに纏めた翠の瞳の男がうずくまり大粒の涙を流していた。当然その周りには野次馬根性丸出しの人だかり。

歓楽街の中心で大泣きしている男こそ僕が助けるべき魔に属する

者。助けるべき……、助けなければならないのだが……。

「なんか元気そうだし……、いっか。帰ろっかな」

僕は泣いている男に見つからないうちに離脱することを決意する。
今日は幸いなことに、化粧の濃いお姉さんが言い寄ってきて無いみたいだし。

僕はくると回れ右をして、極力不自然にならないようにそっと歩き出した。が、

「あっ、朋様！ 助けに来てくださったんですね！！」

見つかった。しかし逃げ始めたら意地でも逃げるしかない。これと決めたことは絶対に曲げないというのも僕の悪の美学の一つだ。

僕はすぐさま体勢を低くして人の波を掻き分けながら駆け出し、

「先手必勝！」

叫んだ。何が先手なのかよく分からないが、僕はそう叫びたい気分だった。

「何が先手必勝のですか？ 朋様」

だって既に目の前には目を赤くした銀髪野郎が立っていたんだもん。先手を取ったら必勝なのがこの世の摂理じゃ無かったのか！？

「僕が先手を取った筈なのにどうして君が目の前にいる」

「どうしてって……、朋様が走り出すからお止めするために先回りしたんですけど？」

「そうじゃなくて、どうやって僕の前に回り込んだ！？」

僕の前に仁王立ちしている男はぽんと手を打った。

「ああそのことですか。普通に走って回り込んだだけですよ。ちょっと見えなかったかもしれないけど、ぼくはヴァンパイアですから」

体力が違うんです。もやしのようなヴァンパイアはそう自慢げに笑った。

彼の名はレイ・アークブルク。腰まで伸びる銀髪を一本にまとめた端正な顔立ちの彼は、真正銘のヴァンパイアだ。唯一にして絶望的な欠点は自分に自信が全く無いこと。美点は、僕の指示に従順であることだ。

僕は大きく溜め息をついてレイと向かい合う。僕は背が低いから見上げるしかないのが癪に障るが。

「それで、今回はどうしたの？」

「ええ……、それがですね」

「あんまりしようもないことだと、僕は君をコンクリートで固めて海に沈めてしまうかも知れない」

僕の言葉を受けてレイは大袈裟に驚き、悲しそうな表情になる。よし、これで下手なことは言えなくなるはず……、

「ぼくの力ってそんなに甘く見られてたんですね……。コンクリート如きじゃ僕を縛ることなんて出来ないのに……。それでですね、今ぼくは喉の渇きが酷くて死にそうなんですよう」

効果は全くありませんでした。さらに依頼内容まで言われてしまった。これで僕は彼を助けるほかなくなってしまうた。面倒くさい……

…。

「兎に角、場所を変えようか」

僕はレイを連れて幽霊屋敷へと足を向けた。

場所は変わって幽霊屋敷の応接室。当然あの黒猫の姿は無かった。深く一人用のソファーに座った僕はおもむろに切り出した。

「お腹が空いてるんだったよね？ それなら前回みたいに輸血パツクでも注文すればいいのかな？」

とりあえずはそれで空腹は防げる筈だ。ちなみにレイはO型の血液が好きらしい。癖がなくて飲みやすいんだとか。

ちなみにレイは2、3人座れるソファーに浅く座って固まっていた。どうしてかと僕が首を傾げていると、レイは滝のように涙を流しながら叫びだした。

「朋様！ あなたは全然お分かりになっておりません！！」

いやわかりたくもねえよ。

「輸血パツクの血ならば確かに腹は膨れますが心は満たされないのです！」

知るか！

「温かい血のとろけるような甘美な甘さを味あわなければ……」

はあ、そうですか。

僕は目の前で力説するへたれヴァンパイアを正直うざったく感じている。ていうかキモい。人間っぽい服装しているから変態にしか見えない。自分の主張をひとしきり叫んで悦に浸っているレイに軽蔑の眼差しを浴びせながら、僕は譲歩を試みた。

「仕方ない、僕の血を飲めばいいよ。一リットルも飲む訳じゃないんでしょ？」

確か一度に200ccしか飲めないと聞いたことがある。するとレイは戦場から逃げ出した臆病者を見るような目で僕を見、大きな溜め息をついた。

「何を言ってるっしやるのですか？ 朋様は男ではないですか」

「は？ 君こそ何を言いたいのか」

僕はその視線に少なからず怒りを覚えながら、なんとかこらえて次の言葉を促す。レイは橋の下に住む子供を哀れんでいるかのような目で僕を見た。

「あのですねえ、ヴァンパイアは異性の血を飲むことで喉を潤し腹を満たし、気分を満たします。同性の血でも駄目なことはありませんが、所詮それは妥協にしか過ぎないのです!!」

拳を固く握りしめ語るレイ。プチッ、と僕の中で何かが切れる音がした。頬の筋肉が強張り、自然に口の端がつり上がるのを感じる。

「で、僕に何をして欲しいのかな？」

「女の子を紹介して頂ければ……」

そこでレイの言葉が途切れ、僕の顔を見て真っ青になっていた。僕の笑顔ってそんなに恐いのかな？　レイは脂汗を流しながら僕の様子を伺う。

「あ、あの……。朋様の血でも……」

僕は片手をレイの前に翳して言葉を止める。そして満面の笑みを作った。目は笑っていないのだろうけど。

「うん。女の子を君にあげるのは無理だけど、紹介くらいならやってあげよう」

レイはまるで神にでも救われる人間のような表情をした。……僕は魔王だけだね。

「ほ、本当ですか！？」

「ただし、一発殴らせろ」

レイは一瞬呆けたように口を開けたまま僕を見つめ、軽く笑って頷き、

「はい、どうぞ。それで血が飲めるのならお安いものです」

立ち上がり目を閉じた。レイは僕のようなチビで細身の童顔なんかが自分に通用するパンチを繰り出せる訳がないとも思っているの

だろう。でもそれが大間違い。

「じゃ、遠慮なくいくよ」

僕はゆらりと立ち上がる。拳を固く握り込み、脚、背筋、そして腕の力をバネのように溜めに溜める。腰には捻りを加え更なる破壊力を目指して力を凝縮。そしてそれが臨界に達すると同時に、声無き雄叫びとともに開放した。

「ふっ!!」

「ごふっ!?!」

全身のバネを生かして放たれた拳は吸い込まれるようにレイの鳩尾に突き刺さる。

「並程度の運動神経しかない朋様が、何故これほどまでの拳、を……」

最後まで言葉を繋ぐ前にレイは地面に崩れ落ちた。僕は最後に決め台詞を放つ。

「人間は技で力を補うんだよ……」

うーん、僕って格好良い！　これぞ悪って感じた。

ひとしきり余韻に浸った後、ポケットから携帯を取り出した。

「約束は果たさなきゃならないよね」

あまり気は進まないが、とある女性に

「お互いに友人と連れ立って食事でもしよう」という旨のメールを送った。

「あとはレイ自身が何とかすればいいよ」

僕は一向に目覚めないへたれなヴァンパイアの横っ腹に蹴りを入れておく。

しかし本当にこいつ、役に立つのかなあ？

魔王様の世界征服の道は前途多難どころか繋がっているのかさえ怪しいようです。悪を追い求める彼に幸福あれ……。

第二話 魔王様とへたれヴァンパイア（後書き）

ここまでよんでくださってありがとうございます。次回、『ヴァンパイアと女の子（仮）』に続きます。鈍亀更新ですが、これからも付き合って頂ければ嬉しいです。

第三話 ヴァンパイア石と化す（前書き）

もつとヴァンパイアをいじめてやろうかと思いましたが、これからの展開を考えるとあまりにも不憫なので自粛。魔王様に痛い目に遭ってもらうことにしました。裏タイトルは『魔王と暴力派三人衆』（笑）

第三話 ヴァンパイア石と化す

正直な話、非常に気が重い。僕はこのメンバーをまとめるリーダーである魔王という職についているというのに、全くと言って良いほど、とういか全然統率というものがとれていない上に、これから向かう先は死地だ。

だというのに隣を歩くキングオブへたれなヴァンパイアは可愛いあの子に牙を突き立てて血を啜るところを想像して頬が緩みっ放しだし、斜め後ろを歩く黒ずくめのオールバック野郎は不機嫌丸出しで僕の後ろ頭を睨みつけている。ちなみに黒ずくめはアル。彼曰く、百年以上生きた猫は人に化けることが出来るらしい。

そして目的地で待つ女性は僕の大敵。どうしてそんな奴に連絡を取ったかつて？ それは単純。年上の女性の知り合いは彼女くらい

いしかいないんだよコンチクショ。正直、逃げ帰りたい気分です。

僕は深く、深くため息を吐き出した。

「はあ、どうしてこんなことになったんだろ？」

「それは底いようもなく貴方のせいです」

間髪入れずに簡潔に答えてくれたのは不機嫌丸出しなアル。

「はつきり言って、貴方の甘さにはほとほと呆れ果てています。このどうしようもないへたれで末期的あがり症のポンコツヴァンパイアの意見なんてダニ以下です。こいつの士気がどうなろうと、とりあえず生かしておけば問題は起り得ませんでしたのに……」

アルの言葉は本人に向けられたものなら核兵器を超える威力を発するほどに酷いものだった。聞こえていないから効果はないみたいだけれど。とういか人権を否定したよ、この猫。ってヴァンパイアだからいいのかな？

「ちよつと言い過ぎじゃない？」

僕はとりあえずはフォローに回ってみる。アルはちつ、と僕に聞こえるように舌打ちをついて面倒臭さそうに言った。

「私を始めとする屋敷に住む者にだったら確かに言い過ぎですが、彼に限っては言い過ぎになることはありません。彼は一度甘やかすと際限なく甘えますし、一度誉めると大気圏を突き破っても収まらない程に鼻が無意味に高くなることでしょう。魔王様も是非そのことを心に留めておいて貰いたいものです」

「……………」

アルの言葉は棘だらけだった。もしかしてアルはレイが嫌いなのだろうか？ それはそれでゆゆしき事態だ。組織は円満でなければならぬ。

とりあえずはこの道を左に曲がってから考えようか。僕は十字路を左に曲がろうと爪先をそちらに向けた。

「あれ？ 朋様、この道は直進では無かったでしょうか？」

「そんなことないよ。左に曲がれば近道になるんだ」

僕は涼しい顔で左の路地に入っていこうと……………、むんずと後ろ襟首を掴まれた。

「ぐえっ！」

カエルが潰れる時のような音が僕の喉の奥から押し出される。って僕を落とす気か！？

「お待ち下さい、魔王様。今回の目的地はそちらからでは行けないでしょう？」

「……………」男には逃げなきゃいけない時があるんだ。止めないでくれ、アル」

僕は襟首を掴んでいるアルの手を払って、しつこいけれど左の道へと進み……………、

「ぐげっ!？」

また掴まれた。その上引っ張られた。首が痛い。せき込みながら、精一杯恨みがましい視線をアルに送った。

「げほっ、げほげほ。ぼ、僕に恨みでもあるのか!？」

「恨みはありませんが、響きだけ格好のよい言葉を使っても見苦しいだけですよ?」

アルは実に涼しい顔で一言だけ。くっ、読まれてる！　しかし、しかしそれでも男にはやらなければならぬときがある！

「アル、僕はまだ自由でいたいんだ。それに君も荷物のある主君は望みじゃ無いでしょ？」

「は？　それはどういう……」

「あー！　見つけたゾ、朋くん♪」

怪訝そうに問うアルの言葉を遮る脳天気な明るい声。

ああ、出た……。頼んでもいないのに迎えに来やがりましたよこのお姉さん。

僕はぶすつと頬を膨らませてそっぽを向く。気付かないふり気付かないふり。

「ちよつと、こんなきれーなおねーさんが声を掛けてるのに無視ってどういうことかなあ？」

「あだだだだっ！！」

ほっぺがつ、ほっぺがつ！　　抓られた上に捻りがっ！！　　あまりの痛みに恥も外聞もなく涙を流し泣き叫ぶ僕。魔王の威厳なんて全くないね。でも痛いんだよおお！

僕の頬を捻り上げている黒のロングヘアーにパツチリした目が印象的なお姉さんは無邪気な笑顔を作る。目が笑っていないから不気味だ。

「とにかく、あいさつね」

「そ、その前にはにやひてくらさひつ（放してください）！」

僕の必死の懇願に、お姉さんは笑顔で容赦なく捻り上げた。足が地面から離れるっ！？

「あ・い・さ・つ！」

「こ、こんばんは。お姉さん！」

「きれーな？」

「こんなきれーなお姉さんに出会えて、僕は幸せですっ！」　「んー、心が籠もって無い気がするけど……、まあいっか」

お姉さんは僕の頬からぱつと手を離れた。僕は酸素を求めて地面の

上で踊り狂う。

「あ、あの……。大丈夫ですか？」

今までのやり取りを呆けて見ていたアルが慌てて僕の傍らに膝をつく。僕は何とか酸素を体中に送り込んで、

「大丈夫、大丈夫。いつものことだから。でも久しぶりだったから……」

ふらふらになりながらも何とか立ち上がった。アルは肩を貸してくれる。が、身長が低い僕は情けないことに、アルの胸の辺りにしがみつくなかった。こういうときに自分の身長の無さが呪わしい。

お姉さんは気を取り直すように息を一つついた。

「さてと、挨拶はこれくらいにして……」

「今までの全てが挨拶ですか!？」

すかさず突っ込みをかますアル。まあ、驚くのは分かるけどこういうのは日常茶飯事なわけですよ、彼女の場合。彼女はアルを見て軽く笑みを零した。

「良い突っ込みだねえ、君。ルックスもかなり良いし」

アルは拍子抜けだったのか間抜けな表情で、はあそうですか、なんて返していた。いきなり掴みかかれるとでも思っていたのだろうか。って彼女の紹介がまだだった。僕は彼女の傍らに立ってアルとレイの方に向き直る。

「あっ、そうだ。紹介が遅れたけど、彼女は奥寺美里さん。僕が一人暮らししていたときのお隣さんだよ」

続けてアルとレイを指す。

「それで美里さん。黒ずくめの突っ込み屋がアルベルト。その銀髪のだで蛸がレイです。二人は今のお隣さんです」

美里さんは花のような微笑みを浮かべて二人に頭を下げる。

「よろしく」

「アルと呼んでください」

「……」

アルはさも面白く無さそうに、レイは茹で蛸のように赤くなったま

ま、小さく会釈を返した。美里さんは面白く無さそうに顔をしかめた。

「んー、顔は良いんだけど二人ともユーモアが足りないわねえ。こんなんじゃない彼女なんてゲット出来ないわよ?」

「私は興味ありませんから」

アルは軽く流した。アルは猫なんだから、人間に興味なんて持てるもんか。レイはというと石像になってしまっていた。……やっぱり凶星なんだ。

「と、とにかく行こうよ。時間も結構たっちゃったし」

僕の提案にアルと美里さんは頷く。レイは……、石化したまま。僕は仕方なくアルに引きずって連れていくように命じたのだった。

僕たちは少し洒落たバーへと場所を移した。正直僕が入って良いところでは無いのだが、まあ主演はレイだし僕はすぐに帰るから問題無いか。

美里さんは淀みない足取りで奥の方へ足を進める。その後ろを僕、アル、レイが続いた。ちなみにレイは既に復活していた。意外に打たれ強い。まあ、顔は青くなったり赤くなったり信号機みたいなんだけどね。

そんな下らないことを考えているうちに美里さんとはあるテーブルに手を振った。

「待った?」

「待った? じゃないよお、美里!」

「ごめーん」

美里さんは座っている女性の一人と笑いながら声を掛け合う。

それにしても美里さんは凄い。

テーブルに着いているメンバーは三人が三人とも全く違うタイプのはっとするほどの美人なのだ。そこの女優さんよりぶっちぎりで

レベルが高い。そこに美里さんが並んで腰掛けることによって異次元の空間が形成された。レイは何か何処か遠い所にトリップして……、ってあれ？　美里さん以外に三人？

「あの、美里さん？　どうして女性陣と男性陣の人数が違うのですようか？」

「あゝ、この子は妹の里香^{さしか}。わたしが合コンに行くって言ったらどうしてもって」

美里さんは隣の吊り目のショートカットの女の子を笑顔で紹介した。ん、どこかで見たことがあるような……。

僕が首を傾げて記憶を掘り返していると、里香はがたと急に立ち上がって僕の胸倉を掴み上げた。

「貴方ね？　私の姉さんをたぶらかす悪は」

里香の細腕が僕をゆっくりと吊り上げていく。何処にそんな力が眠っているのか……、って足が浮いて……。

「す、ストップ！　首が、締まって、る……！」

「問答無用」

里香は無表情に僕の懇願を却下。僕の顔をまじまじと見つめて、

「貴方……、滝川朋？」

何故里香が僕の顔を知っているのかは知らないが酸素は必要だ、僕はがくがくと頷いた。

早くっ、早く離してっ！　　し、死ぬ……。っーか誰か助けて……。

「高校生の分際で姉さんをたぶらかすとは良い度胸ね」
僕の首は更に強い力でぎりぎりと締め上げられた！

「だ、だずげ……」

あ、何か目の前が真っ暗に……。誰かが僕を呼ぶ声を遠くに聞きながら、僕は意識を失った……。

「……うあ？」

目が覚めると、どこか見覚えのある天井が最初に目に入った。何故か首が痛い。ボケツとした頭のままでむくりと上半身を起こした。傍らには黒猫が座っていた。

「ああ、ようやく起きましたか」

アルは眠そうにあくびをかみ殺した。……いまいち状況が把握出来ない。

「アル、どうして僕のが痛いのか分かる？」

「もしかして覚えていないのですか？」

「覚えてないのかって何も覚えて……、あ」

ようやく頭がクリアになってきた。そう言えば美里さんの妹の……、確か里香だっけ、に首締められて落ちたんだった。

「あの後、結局どうなったの？」

「魔王様がお倒れになったあとに美里さんと里香さんはお帰りになりました。その後も残った者で合コンを続けたのですが……」

アルは淡々と事実だけを語っていく。

「ってオイ、僕のこととは放っておいたのかよ。普通はまず怪我人（？）をどうにかするべきだろ。」

突っ込みしたい心を抑えて、次を促す。今は突っ込みよりもレイの吸血の成否に興味がある。

「……ということがありまして、結局レイは石化が解けなくて血を手に入れられませんでした」

「ちよっと待って。ということ、じゃ絶対に読者のみんなに話が伝わらないから」

ん？ 読者って誰だろ？ 今僕の意に反して口が動いたぞ！？ アルも怪訝な表情をしている。

「読者って、何を仰っているのですか？ ああ、頭が駄目になってしまわれたんですね。それでは次の魔王様となる方を探さなければ……」

違った！ こいつ僕の妄言だと思ってやがるよ！！

「ちょっ、違う！　今のは僕の意志じゃ……」

「冗談ですよ。読者は大事にしなければいけませんからね、ええ」
「え……？」

あれ、読者って当然の事なの？　アルはさも当然みたいな顔してるし！　僕がおかしいのか？　おかしいのは僕なのか！？

「では説明しましょう。最初の内は私も彼もルックスが良いのでちやほやされていたのですが、私は無口ですし彼は石化がなかなか解けなくて……」

アルは笑いを堪えながら話を続ける。そんな話はどうでもいいから、僕は読者が誰なのかが気になるんだよ！

「結局レイは一言も発さないうちに、女性達は面白みがないと言われて帰ってしまいました」

「……予想通りの展開だね……」

僕は苦笑を漏らし……、ってそうじゃねえー！　読者について聞きたいんだ……！

「アル、それよりも……」

アルは僕を手で制す。言いたいことは分かっています、とでもいうようなゆったりした動作。

「レイには私の血を飲ませました。曰わく猫の血は不味いらしいのですが、死にはしないだろうと説得いたしました」

違ーうッ！　僕が聞きたいのは読者って何なのかって事であって……。僕が声を掛けようとする、アルはひらりと窓枠に飛び乗った。

「では、もう夜も遅いですので。私はこれで」

「ちょっ、待っ！」

僕が引き留める前にアルは外へと身を躍らせた。僕は呆然と窓の外を見つめる。僕は深く息を吸い込んで、

「読者って誰なんだーっ！！」

近所迷惑も省みず、夜の街に思いつ切り叫んだ。しかしその声は誰の耳に入ることなく、答えは永遠に闇の中に葬られるのだった。

第三話 ヴァンパイア石と化す（後書き）

なんかいまいちな出来になってしまった気がします。でもとりあえず伏線を張れたので一安心。……分かりやすすぎて伏線にもなっていないって？すみません、僕の力不足です……。

第四話 目覚めのキスと遅刻な朝2（前書き）

遅刻な朝第二弾！ ……別に期待してない？ まあ、いいじゃないですか。男のロマンですよ、お早うのキス。

第四話 目覚めのキッスと遅刻な朝2

太陽の光が僕の瞼を刺激する。もう朝らしい。本当なら学校へ行かねばならないけれど、布団の中で微睡むのは本当に気持ちいい。つまりは二度寝最高なわけで……………ぐう。

「お……………」

耳元で誰かが叫んでいる気がする。まあ、誰がいくら叫んだところで二度寝さまに敵うわけが無いんだけどね。多分アルだろうから起きる義理もないけれど。

「おきて……………」

ってあれ、アルの声ってこんなに高かったかな。まだ寝させて欲しいんだよね。

「うーん」

僕は声から遠ざかろうと寝返りを打った。声の主は不満そうにうなり声を上げる。

「うー、こうなったら最後の手段……………」

声の主はベッドに飛び乗った。ベッドが歓喜の声に似た軋む音を上げる。声の主はそのまま僕に覆い被さるように近づいてきて、

「お目覚めのキッス♪」

爆弾発言を繰り出した。

「まてえええい！」

問題行動を起こそうとしたそいつを僕ははねのけ、飛び上がるようにして起き上がる。

「きゃっ！」

声の主のその少女は可愛らしい声を上げて尻餅をついた。僕は重い瞼を持ち上げ、少女の姿を確認する。

彼女は、一言でいえばとても可愛いかった。小柄な体に小さな顔。くりくりと大きな瞳に今は涙をためていて、それは宝石のように輝

いている。僕の学校の制服で身を包み、腰まである色の薄い茶色がかった髪を二本にまとめたその姿は天使のようでさえあった。彼女を知らなかった頃の僕にとっては、だが。

僕は少女を睨み、そして冷ややかに言い放った。こういう時ははつきり言ってやらねばなるまい。

「キミ、誰？」

「はうっ!？」

少女は銃で撃たれたかのように体を仰け反らせる。そのままふらふらと後ずさって、壁に背を預け、なんとか僕を睨んだ。

「あたしのこと、忘れちゃったの……？」

「うん」

即答。すぐさま否定。これでもかと否定。僕のふぁーすとキスを奪おうとした罪は重いのだ。

彼女は今にも泣き出しそうなくらいに、目に一杯の涙をためている。

「どうして……？ 結婚の約束までしてあんなことやこんなことまでした仲なのに……」

ちよつと待て。そんな約束したことない!!

「いやいやいや、してないから! あんなことやこんなことやあれなこともしてないから!」

僕は慌てて横に首を振る。事実無根、冤罪だ! 彼女は僕の慌てふためく様子を見てにやりと笑う。

「それじゃあ今から、してみる？」

彼女はそういつてボタンに手を掛け、一つずつ外しながら僕の方へ歩み寄ってくる。その表情は外見に不釣り合いな妖艶な微笑み。

まずいまずいまずいっ! 世界征服が夢ってこと以外は健全な高校生の僕にとって、これは刺激的過ぎるッ!!

僕は目を右手で覆って必死に止めた。

「待った待った! 忘れてません、覚えてます! ほんの出来心だったんです! だから服をちゃんと着てください!」

僕の制止など気にも留めず、彼女は上着をはだけて僕に歩み寄る。僕は必死でそれを見ないように目を………、瞑れなかった。つまりは彼女の白い肌に目が釘付けになってしまっているわけで。自分の弱っちい意志じゃ抗い難いわけで。指の隙間から覗き見ちゃうわけ。

彼女は僕の理性と本能の葛藤を知ってか知らずか、無造作に無防備に僕に歩み寄る。その表情は僕を誘っているながら、恥じらうように頬にほのかに赤みが差していた。

ごめん、父さん。あんたは大っ嫌いだけど、迷惑だけはかけまいと生きてきたよ。でも今から巨大な迷惑をかけることになりそう。僕は自分の内の獣を抑えられない……！

僕の理性という名の鎖が音を立てて千切れ……、る前に突然と部屋の扉が開いた。

「何をしているのですか、魔王様？」

僕と少女は硬直。僕は冷や汗が吹き出してるし、彼女の顔も青を通り越して白い色になっていた。

いつもは黒猫でいるはずの黒ずくめのアルは、小さくため息をついた。

「沙雪、貴女が魔王様に何をしようが勝手ですが……」
ちなみに沙雪というのは僕の目の前にいる半裸の少女の名だ。つか、

「僕の人権完全無視なのかな？」

アルは僕の質問に答えない。ただ時計を指差して、

「もう八時を過ぎていますよ」

死刑宣告を下した。

「なっ……」

「うそっ……」

僕と沙雪さんは同時に、弾かれるように時計に目を向けた。時刻は八時五分。遅刻決定とまではいかないまでも、非常にマズい時間帯。僕は錆び付いた機械のように、ぎぎぎと首を動かして沙雪さんに

提案した。

「色々聞きたいこととかあるけど、ここは一時休戦して、急ぐことにしない？」

沙雪さんも僕と同じように、ぎぎぎと首を動かす。

「賛成〜。とにかく今は……」

僕と沙雪さんははかるように間を取って、同時に街全体に響きわたるように叫んだ。

「「遅刻するーっ!!」」

第四話 目覚めのキッスと遅刻な朝2（後書き）

しばらくぶりの投稿ですね。朋くんのキャラとかアルのキャラとか文体とかが変わってなければいいんですが……。良ければ評価とか感想とかお願いします。それによって更新スピードが変化します！

そして次回は学校編！ 沙雪の正体とか例のあの人が明かされまくります！！

第五話 遅刻とお姫様抱っこ（前書き）

僕です。魔王の滝川朋です。未だに魔王らしいところとか、僕の格好良いところとかが出ないのはどういう事だ!! 僕が情けないっていうのが定着したらどうしてくれるんだよ!! 今回も僕の不幸と情けなさ全開です。それではどうぞ（泣）

第五話 遅刻とお姫様抱っこ

僕は走っている。それはもう全力で走っている。脚が千切れるんじゃないかという速度で走っている。百メートル日本代表になれるんではないか、つてくらいに走っている。全ては遅刻から逃れる為。担任の鉄拳制裁から身を守る為だ。

「朋、大丈夫う？」

隣から聞こえる能天気な声。僕は辛うじて返事を返す。

「これが、大丈夫につ、見える……!？」

ちらりと横を見ると、全く平常の状態で沙雪さんが走っていた。汗のひとつもかいていない。僕はあまりの理不尽さに馬鹿らしくなつて立ち止まった。なんとか息を整えようと悪戦苦闘する。

「ちょっと、朋! このままじゃ遅刻するよ!」

「もうどうでもいいんだ。沙雪さんは僕の屍を越えて……」

僕はがくりと膝をついた。正直なところ脚が限界だった。気力が切れた僕がそうなるのは必然だろう。

沙雪さんはやれやれ、とでもいうように肩をすくめた。そして僕を持ち上げる。……いわゆるお姫様抱っこで。

「ちよっ、沙雪さん!？」

「朋が遅刻しない為にはこれが一番でしょ？」

「まあそうだけど……」

恥ずかしいんだよ! 仮にも男である僕が、か弱い（外見だけ）女の子にお姫様抱っこだよ!？ こんな知り合いとか姉とか妹とかクラスメートとか沙雪さんファンクラブ会員とかに見つかったら僕は死ぬしかない。

僕はなんとかして下ろして貰えないかと思考をフル回転させる。

「沙雪さん、下ろ……」

「本気で走るから、しっかり掴まっててね？」

そう言つて沙雪さんは僕を自身により引きつけた。何か柔らかいも

の、つまりは身長割に大きい沙雪さんの胸が僕の腕に当たる。ああ、なんかもうどうでもいいかも……。

「それじゃ、行くよ！」

「へ？」

沙雪さんの声と共に急に流れ出す景色。内臓を吹き飛ばすようなG。竜巻が直撃しているような風圧。無理矢理例えるならば、飛行機にしがみついて空を飛んだ、そんなイメージ。

それはあまりにも強烈な衝撃で、僕の意識はガラスのように砕けて消えていった……。

僕が目覚めたのは白い部屋だった。名称を言うなら保健室という。

「あ、良かったあ。大丈夫だった？」

そう言って椅子に座った沙雪さんは、僕の顔を覗き込む。正直なところ、気分は最悪だ。

「大丈夫なわけないよ。鬼と人間じゃ体力とか体の丈夫さとかが根本的に違うんだから……」

「ごめんね？」

沙雪さんは申し訳なさそうに目を伏せた。

水瀬沙雪さんは、鬼と呼ばれる種族だ。外見は人間と殆ど変わらないが、強靱な肉体と底のない体力を持つ。沙雪さん個人に限って言うなら、ゴ○ラも一撃の下に粉碎してしまいそうだ。ついでに沙雪さんは鬼の中では子供で、信じられない話だが年齢は僕より十は上らしい。

沙雪さんはちゃんと反省しているようだ。僕は体を起こして、沙雪さんの頭にぽんと手を置いて優しく微笑む。

「まあ、次から気をつけて。今回は多目に見るから」

「ありがと。やっぱり朋はいい男ねっ！」

そう言って沙雪さんは僕に抱きついた。彼女のその……、胸が当たって非常に気持ちい……、じゃなくて居心地が悪い。

「沙雪さんっ、離れて！ 誰かに見られたら……」

僕の命が危ないんですっ！

しかし沙雪さんは離れない。

「まあいいじゃない。見せつけてあげれば」

何を言っているんだこの人はー！！ マズい、マズいぞ。どうにかしてこの人を引き剥がさなきゃ……。

そのとき突然、保健室の戸が開け放たれた。

「すみません。湿布をくださ、い？」

そう言って硬直する少女。彼女の瞳は僕と沙雪さんをばっちり捉えている。ちなみに沙雪さんは気付いていないようで、僕の胸の辺りに頬摺りしていた。

僕は無駄と知りながら、取り敢えず弁明を試み、

「あの、これには深い訳とかが……」

言い訳の一つも思いつかない。このままでは、あの少女からあること無いこと噂が広まり、僕は沙雪さんファンクラブに磔にされてしまう！

少女は俯いて僕達の方につかつかと歩み寄って来た。これは予想外の行動だ。

少女の存在にようやく気付いた沙雪さんは少女を睨みつけた。

「何よお。今良いところなのに」

いや、ちっともそんな雰囲気じゃありませんでしたから！ 誤解を招くような発言するとはら、その子が勘違いしちゃうから！

少女は僕の前まで来ると殺気の籠もった視線で僕を射抜く。

「滝川朋。貴方、姉さんに続いて水瀬さんにも手を出しているの？」

「え？ 僕は君の姉さんに手を出した覚えは無いって言うか、君が誰なのかも分からないだけど……」

少女は素早く僕の首へ右手を伸ばす。沙雪さんに抱きつかれている僕は為す術もなく首をがっちりと掴まれた。そして締め上げられる。

あれ、なんか既視感^{デジャヴ}？

「私は奥寺里香。奥寺美里の妹」

ああ、美里さんの妹さんかあ。まさかうちの学校の生徒だったなんて知らなかったなあ。……あ、なんか意識が……。

「あんた、あたしの朋に何してくれてんの？」

僕の意識が闇に落ちる寸前、沙雪さんは里香の手首を掴む。瞬間、ごきりと鈍い音がして里香はさっと手を引いた。って折ったの！？

「げほっ、げほげほ……。はあはあ……」

何とか意識を失わずに済んだ僕は里香の右手に目を向けた。見事にぷらんと下を向いている。

里香は右手を左手で庇い、沙雪さんを睨みつける。

「水瀬さん。貴方はその滝川朋という最低な男に騙されているんです」

里香は断言する。

全く知らない女の子に最低とは言われたくないなあ。

沙雪さんも同じ考えのようで里香を睨み返した。

「あんたね、知りもしない人間を、それも朋を最低扱いするとは良い度胸ね。……殺されたいの？」

沙雪さんの目は本気だ！ 里香の出方によっては本当に殺しかねない。僕が止めなきゃ……。

「沙雪さん、抑えて……」

「大丈夫よ、朋。ちゃんと跡形もなく消すから」

何が大丈夫なのですか！？ 問題しか残ってないような気がするの
は僕だけですか！？

里香は沙雪さんの本気に気圧されたのか、ほんの少し後退した。

「く、今は分が悪い……。滝川朋、次に会うときはお前の最期だと思え」

里香はそう言って保健室を後にしていった。全く、何だったんだ？

沙雪さんは僕から体を離して僕に殺気を放った。

「いつの間に、奥寺里香と仲良くなったのかなあ？ さらにその姉

に手を出しただって？」

その殺気は阿修羅とか毘沙門天さえ泣いてひれ伏しそうな、そんな殺気。僕は震えが止まりません。

「そもそもそれは誤解です！ 確かに彼女のお姉さんとは中学生の頃に知り合いましたけど、里香には今日初めて会いました！！」

沙雪さんは激烈な殺気を放ちつつ僕の目をじっと覗き込む。無性に目を逸らしたいが、逸らした瞬間に殺されるだろう。

睨み合いは五分程続き、沙雪さんもようやく殺気を消してくれた。

「まあ、嘘は無いみたいね。許してあげる」

「ありがとうございます……」

僕はあまりの心的疲労でぱたりとベッドに倒れ込んだ。

「そうだ。沙雪さんは彼女、里香のこと知ってる？」

「え、知らないの！？ 彼女、一年生にして剣道部エースで夏のインターハイで優勝してる有名人だよ。その他にも、不良掃討でも有名なのよ？」

「そうなんだ。知らなかった……」

僕は執拗に襲ってくる睡魔について抗えなくなる。

「じゃあ、お休み沙雪さん。僕は寝るよ……」

それだけ言って、僕は意識を手放したのだった。

第五話 遅刻とお姫様抱っこ（後書き）

こんにちは、黒猫のアルです。朋様の弁護をさせていただきます。朋様はそれはもう……（以下略）……以下略とは、陰謀としか思えませんね。まあ、朋様にはこれから活躍して貰いましょう。最後に良いことを教えて差し上げましょう。作者は非常にムラツ氣が激しいです。感想や評価を与えると更新速度が上昇するかわかれます。朋様の活躍の為に是非とも評価や感想をお願いします。

第六話 魔王様の本気と古典的な不良（前書き）

あ、えと……。み、みみなさん、こんにちは。ぼぼ僕ことヴァンパイアのレイです。こ、今回は魔王様のたつての希望で、魔王様の本気が発揮されるらしいです。よ、良かったですね魔王様。それにしても僕の出番は少ないですね。作者は僕が嫌いなのでしょうか……。…。

第六話 魔王様の本気と古典的な不良

その後（第五話の後）僕は結局、放課後まで爆睡していた。つまり僕は、学校に居ながらにして全授業をサボるという離れ業をやったのけたわけだ。まあ、あまり良いことではないけれど。

そして今、僕は沙雪さんと幽霊屋敷への帰路を辿っている。

「いつも思ってるけど、朋って図太いよねえ」

沙雪さんは腕を組んでしみじみと頷いている。僕は何のことか分からないから、問い返してみた。

「それってどういうことなの？」

「それが図太いっていうんだよ」

沙雪さんは笑いをかみ殺すように口元を抑える。

「朋が眠ってから四人の先生が君を起こそうとしたんだけど、どうなったと思う？」

「僕は一体何をしたの？」

本当に、全く覚えがない。

「朋はね、起こされそうになると急に起き上がって、『俺の眠りを妨げる奴は地上でも天国でも地獄でも追い回して、歯あペンチで全部引っこ抜いてその面の皮引き剥がすぞ！』って脅したんだよ。それも君が般若みたいな顔で言うもんだから、先生達はみんな裸足で逃げ出して……」

沙雪さんはもう堪えきれないといったふうに大口を開けて笑い始めた。……沙雪さんは仮にも女の子なのだからそういうのはやめた方がいいと思う。だってほら、幻滅するから。

「沙雪さん、僕は本当にそんなこと言ったの？」

「うん、本当。久しぶりに笑わせて貰いましたよ、くふふふ」

沙雪さんは向こうに行っただま、なかなか帰ってこない。駄目だから。

それにしても、教師に対してそんな暴言を吐いたのなら、明日か

らの学校が憂鬱だなあ。僕は一応優等生で通しているから、先生達も衝撃的だったろうなあ。

まあ、くよくよ考えても仕方が無いから、沙雪さんを引っ張りながら家路を急ぐことにした。どうして急いだのかって？ 何となく嫌な予感がして……、

「おいおい兄ちゃん。可愛い娘連れてんじゃん」

「羨ましいねえ」

「俺達にも分けてくれよ、その幸せ」

悪い予感というのは的中するものだ。僕達に声を掛けてきたのは、トサカのようにおっ立てたリーゼントが特徴の典型的な不良三人組だった。学ランを着ている癖に煙草なんぞをふかしている。

全く、沙雪さんと歩いているといつもこうだ。彼女は鬼だということ差し引けば、極上に可愛いため、五月蠅い男共がやたらと寄ってくるのだ。因みに前回絡まれたのは二か月前。沙雪さんが旅に出る前の日だったのは、もう笑い事でしかない。

なんかもう古いをぶちぎりで通り過ぎて、古典的でさえある不良達は僕達にがに股の不良歩きで近付いてきた。それ、もう流行らないから。見てて哀れだから。

僕はそんなことを考えながら、極力生ぬるい視線を不良達に浴びせてやった。

「何か、用ですか？」

僕はとりあえずは下手に出してみる。最終的には叩きのめすのだが、奴らの出方を伺うのも一興だね。

不良達は僕を気の弱そうな一般学生だとも思っただろう。三人の中で一番背の低い男が下品な笑みを浮かべる。

「いやね、あんまりにもあんたらが幸せそうに歩いてるもんだから

よ。おすそ分けして欲しいなと思ったわけよ」

言葉は僕に向けてのものであったが、小さい不良の視線は沙雪さんを舐めるように眺めていた。

沙雪さんはまだ笑いの波が引いていないのか、未だにお腹を抱えている。ついでに僕と沙雪さんの手はがちり握られていた。

背筋を冷たいものが走る。沙雪さんの美貌を貴様のような雑魚で屑がそんな風に見ると色々減るから見な！

「言ってる意味が良く分かりません……。僕と彼女は用事があるので、これで……」

僕は沙雪さんの手を引いて不良達の横を通り過ぎようとして、

「まあまあ、ちょっと待ちなや」

長身の不良に肩をがちり掴まれた。僕の女の子のように華奢な肩はみしみしと悲鳴を上げる。痛えよ、この馬鹿力が！

そんなとき、沙雪さんの手がぴくりと動いた。ようやく笑いの国からご帰還したようです。

沙雪さんはまず僕を見、次に不良達三人を順番に見て、またもや大爆笑。

「あははははっ！ 朋、この人達天然記念物に指定できるよ！ お腹が捻れる〜！！」

瞬間、気温が二、三度上がった。不良達の怒気で、だ。

「このアマあ、気にしてることを！」

まだ話していなかった不良が沙雪さんにガンを飛ばす……。って分かりにくいな。発言した順番に不良A、B、Cとしよう。というか気にしてるなら服装を改めれば良い話だろうに……。

沙雪さんは不良を睨み返しながら僕の耳元に口を寄せた。

「ねえ、朋。この不良達、身の程を知らなさ過ぎよ。……。殺して良いかな？」

ま、まずい！ 沙雪さんの背中からオーラが立ち昇っている！ 彼女は非常に喧嘩っ早いんだよ。このままじゃ本気で死人が出るだろう。この人は加減を知らないからなあ。

そろそろ本気だして、不良に本当の悪を叩き込みましょうかね。

「沙雪さん、不良の更正は僕の役目だよ」

「そうだったね。久々に朋の本気が見れるかな？」

沙雪さんは僕に前を譲り、身を引いた。

「何をこそそやってるんだあ！？ 俺達を無視するな！！」

不良Aが痺れを切らして声を上げる。不良達はもうすっかり臨戦態勢だった。

僕は大きく息を吸って細く吐き出し、集中を高める。構えることなく不良達と正対し、ただ純粹な感情のない笑みを作り上げた。

「君達じゃ役不足だけど、いいよ。やり合おうじゃないか」

「は？」

不良達は予想外の言葉に一瞬自分を見失い、茹で蛸のように顔を紅くしていく。

「てめえ！ その可愛いツラ、ぐちゃぐちゃにしてやる！」

そう言って動いたのは不良B。僕の懷に一足で飛び込んでくる。見た目に違わず、速い。不良Bはそのままアップパー気味の右を繰り出しす。これも速い。僕はすんでのところで拳をかわし、バックステップで距離を取った。

不良Bの動きは僕の予測の少し上を行っていた。が、それも誤差範囲内。さしたる問題は無い。ほんの少し修正を加えればいいことだ。

不良Bは自分の拳を見て、不思議そうな表情をしている。そんな

Bの肩を不良Aがバンと叩いた。

「何外してんだよ。格好悪いぜ」

「うるせえよ」

Bはそう返して、また僕に肉迫する。やはり速い。そして飛来するのは彼の左ストレート。それを頬に掠らせながら首の動きだけで避けた。

次々に来襲する拳を悉く紙一重で避け、繰り出される蹴りは出る

前に潰す。

僕はまだ一度も手を出さない。不良Bの動きをつぶさに観察し、次の行動、体の運び、拳の軌跡を予測していく。その予測された動きは現実の動きの上に貼り付けられ、不良Bの0.5秒先の動きが全て見えていき、それは完全に同調した。

そして放たれる大振り。それが僕の顔面を捉えるよりも早く、それに力がのるよりも早くかわした。驚愕に染まるBの顔。その顔を見ながら僕は虚空へと拳を放つ。Bは吸い込まれるように拳の先へと顎を晒し、一撃の下に昏倒した。

集中力は最高に高まった。これで僕に怖いものは無くなる。相手が人間であるなら。

「さて、君達はどうするのかな？」

僕は呆然と突っ立っている残りの二人に声をかける。不良AとCは同時に動いた。

「まぐれで倒したからっていい気になるんじゃないねえ！」

二人は僕を挟むように左右から迫る。しかしそのスピードは、先ほどのBに遠く及ばない。僕は難なく顎に拳を合わせて、残りの二人も地面に這い蹲ることになった。

ぱちぱちぱち。

小さいが、高く澄んだ拍手。それと共に沙雪さんは僕に微笑みかけた。

「相変わらず見事だねえ。君の方が身体能力は完全に下だろうに」

「技は力を制す、が僕のモットーだからね」

僕はそう答えながら、自分の鞆を漁る。確かいつも入れてた筈なんだけど……。

「お、あったあった」

散々に鞆をかき回して取り出したのは、バリカンと『悪よ、スマー
トに生きよ』とプリントされた冊子だった。ちなみにその本の作者

は僕自身だ。沙雪さんはため息をつく。

「今日もやるの、それ？」

「うん、当然だよ。やっぱり、トサカは見るに耐えないからね」

僕はにんまりと笑ってバリカンのスイッチを入れる。甲高い振動音と共に刃先が怪しくぶれる。それを不良の頭に押し当てて、綺麗に刈って行ったのだった。

しばらくして、僕の前からは不良が消えた。代わりに坊主頭が三人昏倒している。本当であれば、剃刀で剃り上げてスキンヘッドにした方がより悪っぽいのだが、僕も暇ではない。ていうか面倒なので放置することにした。最後の仕上げに、それぞれの懷に『悪よ、スマートに生きよ』を押し込む。

「これで彼らも悪に目覚めるだろうね、うん」

僕はうんうんと満足して頷いている。

そんな僕の行動の一部始終を、沙雪さんは呆れ顔で静観していた。

「はあ、それって完全に自己満足よね……」

「それがいけないのかな？　僕は悪や魔の者の品性を上げようと必死なんだよ」

「……そう」

それきり沙雪さんは押し黙ってしまった。完全に呆れられてしまったようだ。

それでも僕の悪の美学を崇拝する心は少しも怯まない。いつか僕が世界の支配者になったときにこそ、真の力を発揮するのだから。

まあ、そんな先のことはいいや。今日は早く家に帰って、沙雪さんの仕事の報告を聞くことにしよう。

「さあ帰ろうか、沙雪さん」

「そうしよう。あたし、なんか疲れたよ……」

沙雪さんは肩をおとしてとぼとぼと歩き出した。僕も沙雪さんの隣を歩き、

「止まれ！ 滝川朋！！」

今日二度目の僕のフルネームに、僕と沙雪さんは思わず足を止めたのだった。

第六話 魔王様の本気と古典的な不良（後書き）

みんなー、元気ー？みんなのアイドル、奥寺美里でーす！たった一回しか出てないけど、これでもわたしメインキャラだからみんな忘れないでねー。ていうか作者はわたしを出す気が無いみたい……。美しいって罪ね……。……そんなことは置いておきましょう。じゃあ、次回予告でーす。次回の語り手は、なんと里香ちゃん！朋くんの本気を里香ちゃんがお送りしますよー。

第七話 正義剣道少女と滝川朋の謀略（前書き）

みんな、こんにちは！悩殺ヒロインの沙雪です！みんなの声援であ
たしがメインヒロインになれるかも知れないから、応援よろしくね
☆それでね、みんなに聞いて欲しいことがあるの。今回の主人公
は奥寺里香ちゃんなんだって。ひどいと思わない？あたしっていう
いい女がいるのに、あんな女なのかゴリラなのか分からないような
（注、里香はスレンダーで長身なクールビューティーです）奴を主
人公にするんだよ！？……………大人気ないかな……………？

第七話 正義剣道少女と滝川朋の謀略

「おいおい兄ちゃん。可愛い娘連れてんじゃん」

「羨ましいねえ」

「俺達にも分けてくれよ、その幸せ」

道の向こうから聞こえる下品な笑い声と、芸も工夫もない典型的な不良のセリフ。私が出会った不良は皆、こんなセリフを吐いていたような気がする。

「全く、悪というのはゴキブリのようにしぶといものね」

私こと奥寺里香は今日何度目かの大きなため息をついた。ため息をつくと幸せが逃げていくと言うが、それが真実であると今更に実感する。

私がこの土地へ引っ越して来たとき、この界限に蔓延る不良共は全て徹底的に叩き潰した。その上病院送りにまでしてやったのだから、この界限から不良は絶滅したと思っていた。

それが今日、久しぶりに部活の無い日に会ってしまったとは。正義感の強い私は不良に絡まれて困っている善良な人間を放っておくこともできず、少し億劫に感じながらも助けに入ることを決意した。いつも携えている竹刀を竹刀袋から出して、無造作に歩き出す。

忍ぶことなどは無用。悪を倒す正義は常に堂々たれ、というのは私の掲げる目標の内の一つである。

私は無警戒で声の聞こえた方の路地に曲がり、すぐさま元の路地に引っ込んだ。何か今はあまり出会いたくない人物が居た気がした。「まさか、ねえ。日に二度も会おうなんてことはないと思うんだけど……」

私はそっと路地の向こうを伺う。そこには、今日保健室にたむろしていた二人組がいた。滝川朋と……、確か水瀬沙雪さんだ。二人は不良の前でこそそそと耳打ち合っていた。

「さて、どうするべきか……」

私は首を捻って悩む。

はつきり言うと、私は滝川朋という男が大嫌いなのだ。

彼と出会ったのは三年と半年前の中学校に入学したばかりだった頃のこと。その頃の私は弱い女の子で、容姿もそれなりに良かったため、何度か不良に声を掛けられることがあった。その度に適当なことを言って逃げ出していたのだが、その日は逃げるのに失敗した。

不良達は危ない奴らで、私は暴力を振るわれそうになった。そのとき颯爽と現れたのが、

「お前ら、それが悪の品性を下げてるってのが分からないのか？ 弱い者を寄ってたかっていじめるのは止めろ」

滝川朋だった。彼は竹刀を構えて、自分よりも遥かに大きい不良達にガンを飛ばしていた。ひとりの不良が馬鹿にしたように鼻で笑う。「はっ、チビのくせに正義の味方気取りか？ 止めとけよ。俺達がキレないうちに家に帰ってママのおっぱいでもしゃぶってな」

「はははっ！ そりゃいいや！」

「子供は家でがたがた震えてな！」

不良達は馬鹿のように下品な笑い声をあげていた。滝川朋はやれやれというかのように肩をすくめて溜め息をついた。

「全く、芸の無い奴らだ。社会のゴミ共が」

瞬間、不良達の顔が引きつり、顔をみるみる赤くしていく。

「社会のゴミ、だど？」

「なめんのもいい加減にしやがれ！」

「要望通りぶち殺してやる！！」

不良は三人とも彼に迫る。私は目をぐっと瞑った。誰かが傷つく姿は見たくなかった。正しい志を持つ人間が破れるのを見たくなかった。

そのときの滝川朋は溜め息をつきながら、

「やれやれ、やっぱり芸の欠片もないな」

そうこぼした。

私は直ぐに、恐る恐る目を開いた。何かを何かを殴る爽やかな音と誰かが地面に倒れる鈍い音を聞いたからだ。

そして、立っていたのはただ一人、つまらなそうな表情の華奢な少年だった。

私は頭を下げて感謝を言葉にする。

「あつ、あの……。ありがとう」

「礼なんか言うな。俺はただ、自分勝手な信念を押し通しただけだ」
彼は冷たく言い放ち、竹刀を袋に収めて立ち去っていったのだった。
それからのことだ。

私が強くなろうと決意し、剣道を始めたのは。また、不良から私を助けてくれた人間が全国的に有名な剣道家であることと滝川朋という名前であることは、私がそこそこ強くなった頃に知った。それを知って、私はさらに剣道にのめり込んで行った。全ては少しでも彼に近付くため、理想の正義像に近付くためだった。

だが、滝川朋は私を裏切った。風の噂で、私達が現在通っている高校に進学すると聞いて私は死ぬ気で勉強して（現在朋達が通っている学校はそれなりの進学校である）どうにか同じ学校に入学する事ができた。

私は意気揚々と剣道部に入部し、いつか来る滝川朋と技術と正義の心を高め合う日を心待ちにしていた。

しかし、滝川朋は剣道部に来ることはなかった。別段、他の武術をやっているわけでもなく、三年前の覇気は何処かへ消え去っていた。その上、姉さんや水瀬さんにうつつを抜かしている。

彼は完全に腑抜けてしまった、正義の味方を止めてしまったのだ。

うん、そう思い直すとまた腹が立ってきた。ここは取り敢えずは

静観することにしよう。彼が鍛錬を怠っていないのなら不良に後れを取ることは無いだろうし、もしぼこぼこにされても水瀬さんだけは助けよう。憂いはないぞ、滝川朋。ぼこぼこにされて、武の素晴らしさと正義の尊さを思い出すがいい。

私は再び滝川朋達がいる路地を伺った。するとタイミングよく不良の一人が激昂して叫んだ。

「てめえ！ その可愛いツラ、ぐちゃぐちゃにしてやる！！」

そいつは僅か一足で滝川朋との距離を潰した。速い。即座に繰り出されるアッパー。しかしそれは滝川朋の右頬の空を切り、滝川朋はバックステップで距離を取った。

ん？ 何か違和感があった。が、それが何なのかは分からない。分かったことは、滝川朋よりも不良の方がスピードがあるということとだけだ。

再び、不良が滝川朋の懷に飛び込む。滝川朋は全く反応せず右に首を傾け始め、不良の左ストレートが数瞬前に滝川朋の頭のあった場所を切った。

今のは完全に何かがおかしかった。しかし、その違和感の元が何なのか、全く分からない。こうしている今も不良は次々と拳を繰り出し、滝川朋はゆらりゆらりと拳をかわしていく。それはよくできた演武のようで……、

「！ そんな馬鹿な……！」

私は違和感の正体によく気がついた。

考えてみれば簡単な話だ。避ける側の動きよりも攻撃している側の拳が速ければ、拳は当たるのが普通だろう。それは当然のことだ。拳が繰り出されてから回避に入るのだから。

しかし、今私の目の前でその真逆のことが起こっていた。それは未来でも見えない限り、実現出来ることではない。それならば何故、避けられる？

幾度目かの大振りの拳を滝川朋は軽く避け、何の変哲もない軽そうなパンチを一振り。その一撃で不良は昏倒した。

その後の二人は全くもって呆気なかった。どちらも大振りにカウンターを合わせられて一撃で地面に沈んでしまった。

「一体、どんな鍛錬を積みばあなれるの……？」

私と滝川朋との実力差は絶望的なものだった。少し、ほんの少しでも近づけたと思っていたのに、全く近づいていなかった。むしろ離されてさえた。自分の力はその程度なのか、滝川朋は雲の上の人だともいうのか。そんなのは認めない。私は彼と共に、正義の味方として同じように戦いたい。

「滝川朋……！」

気が付けば、私は彼の名を叫んでいた。別に何かを考えていたわけではない。別に何かをしようと思ったわけでもない。ただ、今呼び止めなければ、私は永遠に彼を見失ってしまうような気がしたのだ。滝川朋と水瀬さんは足を止めて、ゆっくりと振り返った。その顔は非常に不機嫌そうである。

「なに？ 奥寺里香。僕は今忙しいんだ。後にしてくれないかな？」

「そうそう！ あたしと朋はこれからイイコトしに行かなくちゃならないんだから！」

水瀬さんは滝川朋の腕に抱きついて頬を膨らませた。滝川朋はこくこくと頷いた。

「そうそう……、って違うよ！」

何か、取り敢えずは分かったことが一つある。

「え……、こんな可憐な美少女が誘ってるっていうのにい。朋のいけずう」

「自分で美少女とか言ってるのはなあ……」

実力差も正義も悪も関係なく、滝川朋は成敗するべき敵だというのが。

私は竹刀を正眼に構え、叫んだ。

「滝川朋！ 貴様を成敗する！！」

「は？ どうして？」

滝川朋と水瀬さんは目を丸くしている。私にもどうしてこんな行動を取ったのか、良く分からなかった。

だが、一度した宣戦布告は撤回することはできない。

「問答無用！」

竹刀を上段に構え直し、滝川朋へと突進する。何の工夫もない直線的な突進。

「覚悟！！」

それは簡単に避けられる筈の、何の変哲もない上段からの唐竹割り。しかし滝川朋はにやりと笑って、甘んじて脳天で受けた。

パアアアアン！

竹刀の乾いた音が当たりに響き渡って、滝川朋はその場に崩れ落ちた。

「……どうして避けな……」

ピィィィ！

私の問い掛けを遮る甲高い笛の音。

なんだ？ そう思って私が振り返った先には、青い制服に身を包んだ警官だった。

「君、署までご同行願おうか？」

「は？ 私は何も……」

「現場を見られてもしらをきるとは……。いい度胸じゃないか。では、その右手に握られているものは何だ？」

警官は私の右手に握られているものを指差す。そこには、滝川朋を殴って多少歪んだ竹刀。まさか竹刀を避けなかったのは、この為だったのか！

「滝川朋！ 貴様、謀ったなあぁ！！」

水瀬さんに肩を貸してもらい、なんとか起き上がった滝川朋はニヒルに笑う。

「謀った？ 僕は無抵抗で殴られたのに？ それも竹刀で」

「暴れるな！」

私は半ば引きずられるようにして警官に連行される。こちらを見る滝川朋の人を小馬鹿にしたような笑みが妙に癪に触った。

「次は、次は無いと思え！ 滝川朋！！」

後日、私は校長から二週間の自宅謹慎を言い渡されたのだった。
……覚えてろよ、滝川朋……。

第七話 正義剣道少女と滝川朋の謀略（後書き）

里香だ。まさか私が警察に捕まるとは……。滝川朋め、いつか引導を渡してやる……。！ところで話は変わるが、読者数が1000を越えたらしい。私には良く分からないが、作者は泣いて喜んでいたりみたいだ。これからもこの作品を楽しんでくれると嬉しい。では。

第八話 食卓に現れた台風 vs ザリガニ(前書き)

つまりはね、そういうことなんだよね。あ、僕は滝川朋です。それでね、そういうことっていうのはさ、あれだよ。物語の主人公、特にコメデイの主人公はどうしようもなく不幸じゃなきゃならないってこと。僕だって色々野望とかあるのに、全然叶えられないしね。これでも色々努力してきて、今もずっと努力してるって言うのに…
…(つづく)

第八話 食卓に現れた台風 vs ザリガニ

「で、沙雪さん。長老たちの反応はどうだったの？」

「それが全然。あいつら頭固いから、このままじゃ全く動いてくれないよ」

「そっか……、やっぱりね。今は全面戦争は無理か……」

僕は頭を抑えてため息をつく。沙雪さんも同じようにため息をついた。

沙雪さんが今まで家を開けていた理由は、鬼族の長老たちに協力を仰ぐためだった。鬼族が力を貸してくれれば日本の制圧は簡単なんだけど、鬼というのは基本的に平和主義で楽観的なのだ。人生を楽しんでいる彼らを動かすのは容易なことではないらしい。

「とにかくお疲れ様、沙雪さん」

「うん、ありがと。……それでね、あたしはそこで平然とご飯にがつつしてる女が気になるんだけど」

沙雪さんは、何故かテーブルの上座でご飯を食べている女性を指差した。正直に言えば僕もどうして居るのかを切に知りたい。ていうかそれ僕のご飯……。

「美里さん……、どうしてここへ？」

むしろどうやって？

美里さんは食事を中断して顔を上げた。

「どうしてって、朋くんに会いに来たに決まってるじゃない」

「……」

「……」

僕と沙雪さんは頷きあって関わり合いにならないことを決めた。多分美里さんは酔っ払っているんだろう。そうに違いない。いや、そう信じたい……。

美里さんは僕と沙雪さんが黙ったのを見届けると、満足そうに頷いて食事を再開した。ああ、僕のご飯がぁ……。

「それにしても美味しいわね。アルくん、いいお嫁さんになれるわよ」

美里さんはキッチンに立っているアルに、からからと笑いながら声を飛ばす。アルはどう答えていいのか分からないように、

「は、はぁ」

とかいう気のない返事を微妙な笑顔で返していた。

「というか美里さん。アルは男ですよ？ 執事服を着てるのが見えないのですか？」

「ちょっと朋。何なのこの女？」

隣に座っていた沙雪さんは、ちゃんと僕の脇腹をつついて小声で話し掛けてきた。僕も小さな声で返す。

「里香のお姉さんで、中学時代の僕の自称保護者だよ」

「……朋、良くグレなかったね」

「慣れているのは恐ろしいものだよ……」

僕はしみじみと頷きながら、美里さんが隣人だった中学時代を思い返す……。

初めて挨拶に行ったときからいきなりご飯を作れと命令され、それから毎日美里さんの食事を作ることになり、ある日は掃除をしろと命令されて、それ以降は毎週美里さんの部屋を掃除することになり、ある日に洗濯を……これ以上思い出すのは嫌だから以下略で。

ああ、よくグレなかったな僕。僕は僕を誉めてやりたいよ。あ、あれ？ 頬が何か熱いけど、これは………涙？

「よく、頑張ったね……」

沙雪さんは子供にするように優しく頭を撫でてくれた。僕の心はそれだけで救われー。

「どうしたの朋くん。美人アレルギー？ やだ、わたしったら罪作りの女♪」

美里さんの何気ない必殺の一撃で、僕の心は粉々に打ち砕かれた。というか美人アレルギーって何さ？

「沙雪、さん……。僕はもう、このお姉さんの嫌がらせに耐えられませんか……」

「耐えて、耐え抜いて！ そうすればいつか報われるわ！」

沙雪さんは芝居がかったセリフを大きな身振りと共に口にした。それは僕を受け入れようとするようで、僕は素直に沙雪さんがかっちり包容し合う。

「ありがとう、沙雪さん。僕にも、勇気が湧いてきたよ！」

「あたしは応援するよ」

僕と沙雪さんの間に、不屈の傍若無人キャラ掃討同盟が成立した瞬間だった……。かもしれない。

アルは僕達を痛々しいものでも見るような憐れみたっぷりな表情をして、ため息をついた。

「朋様、沙雪。しょうもない三文芝居は止めて、早くご飯を食べてください」

『はい』

僕と沙雪さんは欠片程の名残惜しさも見せずに離れて食卓に戻った。まあ、元々悪ノリだからね。……。でも、三文芝居とは酷いと思う。

これは由緒正しい笑いの型なのに！

ふと、美里さんが今までの騒ぎに関わってこなかったことに気が付いた。稀代の騒ぎたがりが静かだというのは、不思議を通り越して不気味だ。

ちらりと美里さんの方を覗き見ると、彼女は夢中でザリガニを貪っていた。……。ってザリガニ！？ うちの食卓には近所のザリガニが出てくるのか！？

というかザリガニを夢中で食べてる美里さんって一体……。

その後、ツツコミどころ満載な食事は滞りなく進んだ。僕は啞然と美里さんを見てただけなんだけどね……。

大量のザリガニに満足したのか、美里さんは箸を置いた。

「アルくん、ごちそうさま。わたし、伊勢エビを食べたのって初めてなの。ありがとうね」

ええええええ！？ 伊勢エビ！？ 明らかにザリガニだったんですけどおおお！？

アルは極上の営業スマイルを作り上げた。

「また来てくださいね。次も腕を振るいますから」

「ええ、またお邪魔するわ。じゃ朋くん、またね♪」

そう言っただけ美里さんという名の台風は去っていた。ていうかまた来るのかよ……。

「ねえ、アル。さっき美里さんに出してたのってザリガニだよね？」

「さあ、何のことでしょう？ 私は今日、猫の集会があるのでお暇しますね」

アルは適当にしらばっくれて猫になり、窓から身を躍らせた。だからここは二階……。

「何か、疲れたね……」

沙雪さんはげんなりとした表情。僕もため息をついて肯いた。

「そうだね……。何も食べてないのに、何かお腹は一杯だし……」
僕と沙雪さんは顔を見合わせて、大きくため息をついたのだった。

第八話 食卓に現れた台風 vs ザリガニ（後書き）

ってことなんだよね。ってあれ！？ 僕の愚痴が全部流されてる！
？ ……まあ、いいけどさ。僕は愚痴聞くのが専門だから、聞き役
は愚痴言っちゃいけないことは分かってるんだよ。それでも、それ
でも僕は……………（以下愚痴スパイラルにつき省略）

第九話 魔王様の給料日（前書き）

こんにちは。作者の猫小判です。おかげ様で次回が第十話目となります。最初の頃はどうか不安で仕方ありませんでしたが、何とかここまで来ることができました。全ては読者の皆様のおかげです。これからも温かい目で見守ってやってください。

第九話 魔王様の給料日

今日は僕達、幽霊屋敷に住んでいる人達の給料日なんだよ。約一名が旅から帰還してないけれど、彼ならお金が無くても生きていけるだろうと思う。

え？ どこから給料が出ているかだって？ それは知らないんだ。アルは知っているみたいだけど、僕には教えてくれないんだ。

給料は郵送で現金が送られてくる。少し夢が無い気もするけれど、まあ仕方がないよね。お金が貰えればそれでいいしね。あ、いや、別にお金の為に魔王をやってるわけじゃないんだよ？ でも人間、お金がなければ生きていけないからさ。

とにかく、今日は沙雪さんがすごく浮き足立っていた。朝からいきなり僕に飛びついてきたり、授業中ずっとそわそわしていたり、アルに何度も電話してみたり、とにかく落ち着きが無かった。……まあ、いつも落ち着き無い気もするけど。

かく言う僕もワクワクしている。僕の魔王業を評価してくれる唯一のものだし。

そんなわけで、僕と沙雪さんは心持ち早歩きで帰路を進んでいた。沙雪さんは弾むような声を上げた。

「ねえ朋。明日遊びに行こうよ！」

「え？ どうして？」

僕は心底不思議そうに首を傾げる。沙雪さんは一瞬眉間に皺を寄せるが、すぐに元のように笑顔に戻った。かなり機嫌がいいらしい。

「まあまあ、いいでしょ？ あたしは遊びたいの！」

僕は今後の予定を思い出す。……何もなかった。しょうがないけど、付き合っただけかな？

「いいよ。あんまり遠くには行けないけどね」

僕がそう答えると、沙雪さんは輝くような笑顔になる。

「ほ、ホント!? ホントにいいの!?」「う、うん」

沙雪さんは予想以上に喜んでいいる。僕は沙雪さんの勢いに少し押され気味だ。

沙雪さんは、えへへ、とふにやりとした笑顔を浮かべて僕の隣でスキップし始めた。

「じゃあ、どこ行こっか? 遊園地とかに行きたいなあ」

「明日も学校あるから無理だよ……」

僕達は楽しく明日の話をしながら幽霊屋敷へと足を速めた。

「たっだいまー!」

屋敷に着くなり沙雪さんは豪快に扉を開いた。いやいや、そんな力入れたら壊れちゃうし、アルが……、

「沙雪! 貴女は加減というものを知らないのですか!? 屋敷を壊したら弁償してもらいますからね!」

ホラ、ブチキレてますよ? 人間モードのアルが。

沙雪さんはからからと笑っている。

「アルは細かいのよ。今日は給料日なんだから無礼講だよ、無礼講」

「貴女はいつでも無礼講でしょうが!」

うん。僕もアルに激しく同意したいね。

「いーからいーから。早くお給料ちょうだいよ」

「はいはい。全く……」

アルはぶつぶつ言いながらリビングの方へと引っ込む。僕と沙雪さんもアルの後を追ってリビングへと向かった。

「さてと、沙雪はこの封筒。朋様はこれです」

アルは同じ大きさの茶封筒を僕と沙雪さんに渡した。……ん? 何かいつもと違う気が……。

沙雪さんはすぐさま封筒を破って中身を取り出し、金額を確認する。

「やたっ！ 五万五千円！」

沙雪さんは軽く飛び跳ねて、全身で喜びを表現している。

僕もどこからともなく取り出したペーパーナイフで封筒の口を開けて中を覗く。

「あれ？」

いやいや、そんな馬鹿な。あり得るわけがないよ？

僕はもう一度封筒を覗いた。

「いやいやいや」

そんなはずはない。ちょっと疲れてて紙幣が見えないだけだ。そう信じたい。

僕は三度封筒を覗く。

「そ、そんな馬鹿な……！」

僕は封筒を逆さまにして上下に振った。

チャリーン

硬貨が落ちる甲高い小気味の良い音が場に沈黙を呼び込む。落ちた硬貨は五百円玉一枚だった。

僕は石になっていた。沙雪さんは沈痛な面持ちで五百円玉を凝視していた。アルは無表情に僕を見つめていた。

「そっ、そんな馬鹿な……！！！」

一ヶ月の給料がたったの五百円だと！？ 魔王としてあれだけ動き回ったこの一ヶ月は何だったんだっ！ こうなったら今すぐ全ての魔に属する者達を集めて世界征服をしてやるっ！！

「朋様。お気持ちは分かりますが、メッセージが届いておりますので、それを聞いてから行動を考えてください」

アルはそう言って僕に便箋を差し出した。僕は引つたくるように便箋を奪いざっと目を通す。

『前略、ツツコミの得意な朋君。まずは君の給料について明示しよう。最終的に君の手元に行く給料は、部は幽霊屋敷の家賃や食費と光熱費を差し引いた金額だ。今月の君のツツコミ、もとい働きは家賃やその他の金額に遠く及ばない。本来なら君に家賃等を請求しなければならぬのだが、それはあまりに可哀想だから、五百円入れておいた。今後はもっとツツコミを磨くように』

あの、僕の給料はツツコミに出てたんですか？ 何か目の奥が熱いんですけど。頬に熱いのが一筋流れてるんですけど。もしかして、これは……涙？

僕は静かに、静かに泣いた。何か色々、全部が涙を誘った。沙雪さんが僕を優しく抱き締めてくれた。

「朋、元気出して……」

「沙雪さあん。僕は、僕はもう駄目だよ……」

「大丈夫。あたしやアルがついてるから……」

「沙雪さん……、ごめん。僕、明日遊びに行けないよ……」

「えっ!？」

沙雪さんは僕から離れて僕の目を見つめる。恐らく本当に遊びに行けないのか問うているのだろう。僕は首を横に振ることしかできなかった。

「そ、そんな……。あたし、楽しみにしてたのに……」

沙雪さんは泣き崩れてしまった。

僕と沙雪さんは静かに泣き続け、アルは一人途方に暮れていた。

「私は、どうすれば良いのでしょうか……」

「その頃のレイ」

レイの元にも給料の茶封筒が着いていた。彼も例に漏れず給料日を楽しみにしている。

レイは素早く封筒を爪で切り裂き、中身の紙を手にとった。それは福沢諭吉でも樋口一葉でも野口英世でも新渡戸稲造でも夏目漱石でもなかった。

それは、小さな達筆な文字が踊っている便箋だった。

『君の働きは一円の価値さえない。むしろ罰金ものだ。来月の給料は五割の減額とする』

「そんな殺生な……」

アルは六畳一間のアパートの部屋の隅でうずくまってさめざめと泣き続けた……。

第九話 魔王様の給料日（後書き）

次回は第十話！といっても何か特別なことをするわけでは無いです。何となく次回予告をいたします。次回は学校の話。生徒会会長を決定するために、全校生徒がぶつかり合います！朋は誰を勝利に導きどんな地位を手に入れるのか！？……猫小判テスト期間につき、遅れる可能性があります。

第十話 滝川朋と天敵な生徒会副会長（前書き）

前回のあとがきで書いた次回予告の半分も達成出来てません。すみませんでした。今後はもう次回予告は自粛します。

第十話 滝川朋と天敵な生徒会副会長

「やあ、滝川君。少し、いいかい？」

いつもの学校の昼下がり。僕に声を掛けてきた人物は、僕が一番会いたくない人物だった。

僕は思い切り悪意を込めて言葉を放った。

「良くないです。自分の居場所に戻ってください。出来れば死んでくれれば上出来です」

「ご挨拶だな……」

僕より一つ年上の少年はやれやれと小さく肩をすくめた。そのどこか優雅な感じな仕草が僕の癪に触っているというのが分からないのだろうか？

彼の名は高崎^{あきら}瞭。剣道部部长で生徒会副会長を務めている。すらっと背が高く、目鼻立ちのすっきりしている、いわゆる美形と呼ばれる容姿を持っている上に、頭脳明晰、運動神経抜群、そして性格にさえ欠点が無い完璧超人だ。……別にうらやましいわけじゃない。うらやましくなんか、うらやましくなんか……。

嫌いになる要素が無いように思えるが、高崎先輩は屋敷の人間にさえ知られたくない僕の秘密を知っている。まあ、彼が秘密をネタに恐喝まがいのことをする人間ではないことは分かっているが、嫌なもの嫌なんだ。むしろ生理的に嫌。

僕は更に冷たい言葉を重ねた。

「落ち込んでる暇があるなら僕の前からすぐに消えてください。やっぱり世界から消えてください。消滅しやがれ」

「消滅ときたか……。全く、何が気に入らないんだい？」

「全部です。どうでもいいから早く消えろ」

僕は犬でも追い払うかのようにしっしっ手を振る。高崎先輩は僕

の言葉を全部真に受けたらしく、うーんと唸りながら首をひねっていた。

全く、この人は他人の言うことを真に受けすぎなんだよ……。それが一番ウザいんだけど。

「……要件は何ですか？ 五文字以内に纏めて説明してください」
高崎先輩は腕を組んで一言。

「生徒会選挙」

……は？ 何を言っているんだろうこの人。分かんねー。

高崎先輩は口を閉じたまま、説明さえしようとしなない。……もしかして、五文字以内っていうのを守っているのか？ いや、きっとそうなんだろう。

僕はどつと疲れた気がして深く、深くため息をついた。

「もういいです。気が済むまで要件の中身を説明してください」

「いいのか？ では話そう。あれは一年前の今頃……」

あれ？ 出だしがおかしくない？ でも気が済むまで聞くなって言っただ手前、最後まで聞かなきゃならいだろう……。

〓五時間後〓

「……という訳で君に生徒会ポスト争奪戦の手助けを頼みたい」

「は、はぁ」

つ、疲れたー！ というか五時間って何！？ 何をそんなに説明してたの！？ もう外は真っ暗だよ！！ ああ、アルのことだ。僕の晩御飯はしっかり処理されて残っていないんだろうな……。だから高崎先輩は嫌いなんだ……。

高崎先輩の話 요약するとこうだ。高崎先輩は生徒会会長に立候補しているらしい。

ただ、ここの生徒会選挙は他校とは違って、立候補者がそれぞれ南門、北門、東門、西門からスタートして、一番早く校長室にたどり着いたものが生徒会会長になれるというものだという。更に、立候補者には一般生徒が妨害できるというシステムがある。つまりは人望のない人間でも、よほどの能力があれば生徒会会長になれるというのだ。ちなみに妨害は道具さえ使わなければ何をやってもいいという野蛮なもの。

そして、勝利するためには僕の力が必要らしい。

……既にツツコミどころが多すぎてどこからツツコめばいいのやら……。

「で、先輩。どうして僕の力が必要なんでしょうか？」

そう、最大の謎はこれだ。道具使用不可なら竹刀も使えないということ。竹刀を使えない僕は、あまり役に立たない気がするのだけど……。タイマンなら最強の自負はあるけどね。

高崎先輩は、ぽんと思い出したように手を打った。

「ああ、その説明を忘れていた。では話そう。それは今年の春の……」

「先輩。簡潔にお願いします」

さっきみたいな長話はもうごめんだ。

高崎先輩はとても残念そうに顔を曇らせた。

「仕方ない、簡潔に行こう。君には全校生徒の約六分の一が所属するファンクラブがついているんだ」

「……はい？」

僕は予想外の答えにぽかんと口を開く。高崎先輩はご丁寧に説明までしてくれた。

「ファンクラブの名前は『朋くんを弟にし隊』だ。全学年女子の半

分と少数の男子が所属している」

「何いいいい!?!」

何だ『朋くんを弟にし隊』って!?! そんな集団初めて聞いたぞ!?!
つかファンクラブって女子も作るのか!?!

「ちなみに隊長は水瀬沙雪君だ」

「何ですとおおおお!?!」

あのクソアマ、何してくれてやがるんですか!?! 何か女子の僕への態度が妙だなと思ったのは沙雪さんのせいかなぁあ!?!

高崎先輩は僕の心の叫びなんかお構いなしに問う。

「それで、協力してくれるのかい?」

僕は必死で心の叫びを抑え込む。これは今爆発させるべきではない。屋敷で、沙雪さんに爆発させるべきだ。

どうにか心の中で暴れるものを押さえ込んだ僕は、黒い笑みを浮かべる。いわば魔王の微笑み。

「高崎先輩。僕が義理や人情で動く人間じゃないのは知っていますよね。……報酬は何ですか?」

「ふむ、生徒会副会長でどうかな?」

む、悪くない条件だ。この学校における生徒会の権力は絶大。恐らく教職員よりも上だろう。その代わりに運動部連合という天敵もいるが。しかし、しかしどこか決め手に欠ける……。

僕が洩るように黙っていると、高崎先輩は懷から一枚の写真を取り出した。そ、それはもしや……!?!

「私が生徒会会長になったあかつきには、君に彼女の写真をあと十枚進呈しよう」

「分かりました。全力を尽くします」

僕は即答。二つ返事でOKした。

……ってしまった!?! 嵌められた!?! 僕の想い人の写真を使うなんて卑怯な!?!

高崎先輩は満足そうに頷いて、
「君の働きに期待しているよ。では、明後日、戦場で会おう」

颯爽と教室を去っていった。僕はぽつりと一人教室に取り残された。

「……大変なこと約束しちゃったなあ……」

まさか彼女の写真につられるとは。

僕は自分の未熟を呪いつつ、同時に頬が緩んでいるのも感じた。

誰だ、浅ましいって言ったの！！　僕だってねえ、魔王なんかや

ってるけど高校生なんだよ？　そりゃ想い人の一人や二人くらい…

…、って終わり！？　僕の言い訳の時間は！？　僕に弁明のチャ…

……（強制終了）

第十話 滝川朋と天敵な生徒会副会長（後書き）

ファンクラブについて……『朋くんを弟にし隊』を最大グループとして、他にも沢山のファンクラブが存在します。沙雪さんや里香、高崎先輩のファンクラブもあります。小規模ですが、朋くんの想い人のファンクラブもありますよ。ちなみに『朋くんを弟にし隊』の主な活動は、朋くんの活動日記と（ストーキング）、写真撮影（盗撮）が主なものです。

第十一話 全てが謎な校長と生徒会長争奪戦開幕（前書き）

今回、いつもよりも多少短いです。次回への布石……………かもしれない。

第十一話 全てが謎な校長と生徒会長争奪戦開幕

今日は生徒会選挙の日。というか、選挙ではなくふざけた乱闘パーティーなのだけど。

僕は高崎先輩の陣営であるため、東門で高崎先輩を待っていた。彼はまだ来ていない。ついでに隣では、沙雪さんが空をぽけっ、と見つめていた。

「ねえ、沙雪さん。大体想像はつくけど、高崎先輩の陣営に手を貸すの？」

「うん、当たり前よ！」

沙雪さんは僕に視線を移し、任せて、とでも言うかのようにどんと胸を叩いた。

……おかしい。沙雪さんも高崎先輩を嫌っていた筈だ。それこそ親の敵とでもいうかのように。それなのに、どうしてこんなにやる気満々何だろう？ ……はっ！ もしや……。

僕は沙雪さんのちょっとした表情の変化も捉えられるように軽く集中して、問う。

「沙雪さん。もしかして買収されたの？」

「えっ!？」

沙雪さんはあからさまに驚いた。それはもう、耳元で大きな音を立てられた子猫のように飛び上がって。

高崎先輩も必死だな。

沙雪さんはきよろきよろとせわしなく視線を辺りにさまよわせている。そこら辺に答えが落ちてるわけ無いのにね。

「えーと、んーと……。そう！ 高崎先輩と和解し……」

「物で釣られたんだね？」

「う……」

「釣られたんでしょ？」

僕の追及に沙雪さんは諦めたように小さく肯いた。

全く、あのクソ野郎（高崎先輩）は美学って奴を持って無いのかよ。

「それは違うな。美学というものは勝者にしか語れないのだ。美学が先では無く、勝利が先だと言うことを認識し直すべきだよ、滝川君」

「うわっっ!？」

なっ! 高崎先輩、いきなりここに現れなかったか!？」

僕が沙雪さんに目配せすると、沙雪さんにも認識できなかったらしく、彼女は目を白黒させていた。何者なんだ、高崎先輩は？

「さて、これから生徒会長争奪戦が始まるわけだが。まず初めに言っておく。敵は運動部連合盟主のバレー部部长、三朝葵^{みさきあおい}以下五人だ。その外は棄権した」

「棄権って……。何しやがったんですか、高崎先輩……」

この男のこと、恐らく強請ったんだろうね。基本的に素直だけど、敵には容赦がないから……。

沙雪さんはさも不思議そうな顔で尋ねた。

「その三朝先輩はどうして棄権しなかったんですか？」

「それ、僕も聞きたいです」

「いやな、ヒーローにはライバルが付きものだろう？」

得意気に語る高崎先輩。硬直する僕と沙雪さん。恐らく僕と沙雪さんの思考は今、一致していると思う。

――こいつ、どうしようもない馬鹿だ――

「二人ともどうした？」

『何でもないですよ!』

訝しげな視線を投げてくる高崎先輩に、僕と沙雪さんは同時に愛想笑いを浮かべて、首を横に振った。

「そうか？」

高崎先輩は納得してはいないようだが、追及する気は無いらしい。

僕が胸をなでおろしていると突然、スピーカーに電源が入るとき
の音が耳に届いた。

『皆、元気ですかーッ!?』

同時に響いた大地を揺るがすような大音量に、僕と沙雪さんは飛び
上がって驚いた。高崎先輩は、またか、と呟いて、ため息をついた。

『俺が校長じゃ!』

校庭に備えてあるスピーカーがそんなことをのたまった。

「こ、校長!? あたし、そんなのいないと思ってたよ!」

沙雪さんの言葉に僕も肯いた。

入学してから今まで、色々な行事をこなしてきたが、校長が出て
きたのを一度も見たことがない。校長の役割は、いつも教頭が担っ
ていたのだ。

驚く僕達に、高崎先輩は半ば諦めたように言った。

「校長は昔からこの行事にのみ、そして声だけ参加しているらしい。
だから、校長が誰なのか知っている人間は、ここ十年程の間に一人
もいないんだ」

「それ、校長って言うんですか?」

実際、校長の責務を果たしていない気がする。高崎先輩は深く、深
くため息をついた。

「校長兼理事長だからな。何をしても許されるらしい」

「横暴ですね……」

なんて羨まし……、いやいやなんて悪い校長なだろう。いつか悪
の鉄槌をくらわせるべきだね。悪は更なる悪に淘汰されて然るべき
なのだ!

「朋、顔が悪い人みたいになってるよ?」

沙雪さんの耳元で囁いた。まずいまずい。早くも正体を曝してし
まうところだった。

「ごめんごめん。これから気を付けるよ」

僕はいつもの爽やかスマイルで返す。沙雪さんは微妙な表情で曖昧
に肯いた。

「その笑顔、気持ち悪いね」

「ひどっ!?!」

沙雪さんの一言で僕の弱いハートはずたずたのぼろぼろだよ!　そういうのは生暖かい笑顔で本人が気付くまで見守ってやるべきだよ!

「滝川君、始まるぞ」

高崎先輩は僕の肩に手を置いた。その顔は真剣そのもの。

今までBGMと化していた校長の声が遠くの山まで木霊する。

『これより、生徒会長争奪戦、スタートじゃ!!!』

そうして、血で血を洗う最高に最悪な戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

第十一話 全てが謎な校長と生徒会長争奪戦開幕（後書き）

現在テスト期間中だというのに更新してしまった馬鹿な僕……。そんな僕に愛の手（感想）を……。更新周期が速まるかもしれません。

第十二話 魔王様は普通を超えられない!? (前書き)

サブタイトルは苦し紛れの意味の無い戯れ言かも知れません。本当のサブタイトルは「生徒会長争奪戦、前半戦」です。

第十二話 魔王様は普通を超えられない!?

僕、沙雪さん、高崎先輩は廊下を風のように走る。平時なら、今頃風紀委員に死ぬほど追いかけて回されているところだけれど、今日は生徒会長争奪戦。完全に無礼講だ。

僕らの前に人が立ちふさがることではなく、僕達を見た生徒達は引き潮のようにさっと引いていく。

「ふむ。分かってはいたが、なかなか爽快なものだな」

高崎先輩は息の乱れもなく、軽やかに走る。そのフォームは全くの無駄のない完璧なものだ。

「お姫様にでもなった気分だね」

沙雪さんはいつもの雰囲気で、しかし飛ぶように駆けている。そのフォームは無駄だらけでありながら、豹のようにしなやかで美しかった。

「二人っ、とも、はっはっ、待って、くれ……!」

僕はというと全力をゆうに超える疾走で、既に脚はふらふら、息は絶え絶え、意識は既に白みかけていた。どうしてそんなに限界を超えて走っているのか？ 全ては沙雪さんが僕の右手を掴んで引っ張りながら走っているからだ。

高崎先輩は仕方なさそうに立ち止まる。

「水瀬君、止まってくれ。滝川君が、今使いものにならなくなるのは困る」

「はい」

沙雪さんはやる気無さそうに返事を返してぴたりと立ち止まる。止まると同時に僕は地面にへばりついた。

「はあっ、はあっ……」

し、死ぬところだった。死なないにしても脚が千切れてしまうところだった。生きてるって素晴らしい!!

高崎先輩は僕を見下ろしてこれ見よがしにため息をついた。

「滝川君。君は運動神経が皆無だね」

「あっ、先輩もそう思います？ 朋、技は良いんですが、体力が圧倒的に劣ってますからねー」

沙雪さんは僕を見下ろし、高崎先輩に便乗して言いたい放題。

沙雪さん、キャラおかしくない？ 君は僕を擁護してくれるんじゃない？ つか、僕の身体能力は標準くらいだと思うんだけど。百メートル、七秒八四なんだけど。鬼と一緒にくたにして欲しくないし、鬼と対張ってる高崎先輩は何者だよ？

僕は言いたいことが色々と爆発しそうだったが、まずは息を落ち着かせることにする。

吸って、はいて、吸って、はいて、吸って、はいて、はいて、吸わずにはいて。

あれ？ 何か、息が苦しく……。

「はいてはいてはいて〜」

「って沙雪さん！ 君、僕の耳元で何洗脳しようとしてるの！？」

僕ははきすぎた分の息を大きく吸い込んだ。沙雪さんは可愛くちろりと舌を出した。

「だって、朋も一回はやったでしょ？」

「確かにやったけど！ 本当に大変なことになるから今は止めて！」
僕は実際にこの方法で、小学校の時に同級生をチアノーゼで病院送りにしたことがある。

沙雪さんは実につまらなそうに唇を尖らせ、

「は〜い」

しかし簡単に引き下がってくれた。

「ふむ。夫婦漫才はそろそろ止めて欲しいのだが」

高崎先輩は、咳払いをして、そんなことを、のたまった。

「えっ、本当ですかぁ？ あたし、高崎先輩のこと塵虫以下だと思ってたんですけど、見直しちゃったなあ。ノミくらいにしてあげます」

沙雪さんは顔を赤くして体をくねらせている。

「の、ノミか……」

高崎先輩はショックを隠しきれず、地に膝をついた。これは僕もトドメを刺しに行かねばなるまい。

「僕と沙雪さんが夫婦だなんて、思い違いもいいところですね。そんなだから高崎先輩はいつまで経ってもミミズ以上ミミズ以下なんですよ」

「ほう、ミミズか。ありがとう、滝川君。励ましてくれて」

高崎先輩は若干元気が出たように僕に笑いかけ、震える膝を押さえて立ち上がった。

あれ？　なんか立ち直ってる！？　ミミズは励まし言葉じゃないだろ！！

「では、先を急ごう！」

高崎先輩は完全に立ち直ったらしく、そう言って走り出した。

僕と沙雪さんは互いに顔を見合わせる。

「沙雪さん、あの人って………何？」

「あたしが訊きたいよ………」

僕達は同時に深いため息をつき、先行する高崎先輩を追って走り出した。

僕達は順調に校長室に向かって走る、走る、走る。今度は僕が先頭だから、少し遅いが、立ち止まって致命的なロスを作るよりはずっとマシだ。

人波の引いた廊下を疾走し、誰もいない階段を駆け上がる。ここを上がりきれば、校長室は目の前だ。

「止まれ、貴様等！」

階段の上に仁王立ちしている男が僕達を制止しようとして叫び声を上げる。僕は減速し始め、沙雪さんと高崎先輩はどうしてか加速し

でした。

急に慌て出す仁王立ちの人物。

「あっ、ちょっ。と、止まれ!!」

二人はまだまだ加速!

「ちょっ、待っ……」

「「ツイン・ラリアット!!」」

沙雪さんと高崎先輩は疾走の勢いのままに、仁王立ち男の首の少し下にラリアットの要領で腕を叩き込み、振り抜く。

「がっ……!!」

仁王立ち男は受け身を取れず、空中で一回転して、地面に沈んだ。

「二人共、何やってるの!?!」

ようやく階段を登りきった僕は、地面に伏せている仁王立ち男に目を向ける。彼は口から泡を吹いてビクビクと痙攣していた。

二人はゆっくりと僕の方へと振り向いた。

「敵は倒すのみだよ」

「水瀬君の言うとおりだ。滝川君、鈍ったのではないかい?」

沙雪さんと高崎先輩はさも当然というように言った。

この二人は僕がおかしいとでも言うのだろうか? いや、違う。

常識を考えろ! 泡吹くほどダメージを与えちゃ駄目だよ!!

「……でも、やってしまったものは仕方ない、か。彼には悪いけど、無視して先に……」

『そうはさせないわよ!』

そう叫んで僕達、高崎先輩パーティの前に現れたのは……。

第十二話 魔王様は普通を超えられない!? (後書き)

生徒会長争奪戦編はまだまだ続きます。次回から暴力と謀略飛び交う戦闘編に突入!!

第十三話 女は下らないことで恐ろしい口喧嘩をするものらしい……

（前回までのあらすじ）

ついに勃発した生徒会長争奪戦。戦いは激戦を極め、高崎瞭、水瀬沙雪、滝川朋の三人は次々と一般雑魚生徒の屍を積み上げて行く。しかし一騎当千の強者達も、数に頼んだ一般生徒達の波状攻撃に、もはや疲労困憊だった。

それでも三人は敵を蹴散らしていくが、ついに瞭が一般生徒に紛れ込んだ運動部連合の刺客のでこぴんによって崩れ落ちる。

「滝川君、水瀬君……。後は全て君たちに任せ、た……」

続いて朋も敵の放った痺れ矢によって、地に這った。

「沙雪さん……。この学校の全ては貴女に……」

仲間を失った沙雪は潜在能力を解放し、一般生徒の群へと飛び込んで行く。

「その背後にいるであろう、正義を倒す為に……」

「……沙雪さん。三百文字も使って嘘ついて、楽しい？」

僕は深くため息をつき、肩を落とした。沙雪さんは両手を腰に当てて威張るように胸を反らせた。

「当然！ そうしていつかあたしが主人公の話が……」

「あゝ、はいはい」

僕はとりあえずは同意しておく。こうなった輩には基本的に逆らわない方が良いというのが全世界共通の定理だ。

「あの……。そろそろ自己紹介していいでしょうか？」

おずおずと切り出したのは、前回の最後の最後に僕達の前に現れた三人組のリーダーらしき人物。すらりと背の高い黒髪黒瞳で吊り目の一つ上の女生徒だった。

それには高崎先輩が鷹揚に返した。

「ああ。構わない」

「ありがとうございます。……では改めまして、私は女子空手部主将の橘葉です」
たちはなよう

橘先輩は柔らかに微笑んで優雅に頭を垂れた。見た目の雰囲気とは裏腹に、橘先輩はとても丁寧な人らしい。

橘先輩は一步下がり、代わりに残りの二人が一步踏み出す。

片方は褐色に焼けた肌が眩しいスポーツ刈りのゴツゴツした大男。もう片方は病的に白い肌と銀色の髪が印象的な線の細い眼鏡をかけた男だ。

まずは大男が口を開く。

「俺はサッカー部主将の稲葉徹だ。いなばてつ宜しくな」

続いて線の細い男が細い声を上げる。

「自分はバスケット部主将の碓井幸。うすいこう以後、お見知りおきを」

稲葉先輩は会釈のように小さく、碓井先輩はゆっくりと丁寧に頭を下げた。二人の性格は見た目の印象通りだった。

「僕は……」

「貴方のことは知っていますよ」

僕が口を開こうとすると、橘先輩に片手で制された。

ん？ 僕と橘先輩は絶対に初対面の筈なのですが？

橘先輩は得意気な表情で語り出した。

「私は『朋くんを弟にし隊』の隊員No. 3です。貴方のことであれば、少なくとも貴方のクラスメイトたちよりは知っているつもりです」

こ、怖ーッッ！！ お巡りさーん、ストーカーさんがここにいますっ！ 捕まえて僕から半径二十キロより遠くへ離してください！！
僕がストーカーの恐怖にがたがた震えている時、沙雪さんは険しい表情で橘先輩を睨む。

「橘先輩、……いえ、No. 3。貴女は重大な禁を犯した……」
沙雪さんの表情は今までに無いほどに険しい。

いいぞ沙雪さん！ ガツンと言ってやってくれ！！

沙雪は小さく息を吸って、叫ぶように橘先輩に言葉をぶつける。

「No. 3! 朋の情報の代わりに朋と直接の関わり合いを持たない、という規約を忘れたというの!？」

ええ!？ そこ!？ そこの!？ とうか僕を売ったのは沙雪さんか! なんとということだ……。僕に味方はいないと言うのか……。

僕の心情とか人権とかはお構いなしに、橘先輩は沙雪さんに食い下がる。

「今回の事故でしょう!？」

「事故さえ未然に防ぐのが『朋くんを弟にし隊』の隊員の役目よ!」

「それはあんまりです! 第一、No. 0。貴女はどうしていつも朋くんの隣にいるのですか? 私達には近寄るなど言っておきながら、貴女は朋くんの周りにいるなんて不公平ではないですか!」

「あたしには朋の情報を集めて貴女達に報告するっていう役目があるの!」

「それは元を辿れば貴女が朋くんを独り占めしているからでしょう!？ 私達にも少しは分けて下さい!」

沙雪さんと橘先輩は甲高い金切り声でギャーギャー言い争っている。正直、当事者である僕を萱の外に置いておくのはどうかと思うのだけれど、女性の口喧嘩に割って入れるほど僕は無謀じゃない。

と、無謀にも二人の間に割って入る輩が一人。バスケ部主将の碓井先輩だ。あゝあ、ご愁傷様です。

「二人共、今はそういう話をしている場合では……」

「黙ってなさい!」

沙雪さんと橘先輩のフックが碓井先輩の両頬を襲い、完全に虚をつかれた碓井先輩はその場に力無く崩れ落ちた。

僕と高崎先輩、稲葉先輩は犬に睨まれた子猫のように震え上がっていた。

「高崎先輩……、女性の口喧嘩は恐ろしいですね……」

「全くだ……」

「俺はあの二人が特別な気がするがな……」

三者三様に僕達は大きなため息をついた。

でも、いつまでも二人の口喧嘩を静観している訳にもいかない。

僕達は先を急いでいるんだ。早く橘先輩と稲葉先輩を下して、校長室に向かわなければいけないのだ。

僕は意を決して二人の間に割り込み、まずは沙雪さんの耳元に口を寄せて囁いた。

「沙雪さん、ここは僕が決着をつけるから退いてくれ。……命令だよ」

僕は魔王の権限を発動し、沙雪さんは苦い顔をしながらも静かに引き下がった。

沙雪さんが退いたのを確認してから、橘先輩に向き直る。

「橘先輩、今日は僕がお相手させて頂きます。ここは簡潔に拳で決着をつけましょう。貴女が負けたら僕達は先へ進む。貴女が勝てば貴女達に生徒会は譲ります。いかがでしょう？」

橘先輩は軽く目を見開く。

……いくら見た目が弱そうだからって、驚かれたら傷つくんだよ、僕。

「……私は可愛い男の子をいたぶる趣味は無いのですが……」

「まあ、そう言わずに、ね」

僕は微笑みを浮かべながらも、意識と体を戦闘態勢にシフトする。途端に体中に漲る熱い闘争心。滲み出る平凡ならぬ闘気。空気の色が突然変わったかのような殺伐とした雰囲気。

橘先輩は僕の変質を感じたのか、ぴたりと体を硬直させた。

「……弱い者いじめ、というわけにはいかないようですね」

橘先輩は拳を中段に構えて鋭く息をはいた。瞬間、その場からおちやらけた雰囲気が一瞬で吹き飛ぶ。

「では、参ります！」

僕と橘先輩は同時に地を蹴り、闘いの火蓋は切って落とされた。

朋は闘いを始めちゃった。本当は暴れたかったけど、魔王様の命令権を発動されちゃね。あたしは手を出せなくなったというわけで。ちなみにあたしは沙雪。今は高崎先輩と並んで、黒いごつごつした奴とにらみ合っていた。確か、サッカー部主将の稲葉先輩だっけ？不意に高崎先輩が稲葉先輩に語りかけた。

「拳で決着という野蛮な決闘はやめにしないか？」

高崎先輩は相変わらずへたれだ。拳で語れない男は男なんかじゃないね。

稲葉先輩は拳を握りしめて、軽く戦闘の構えをとった。

「面倒なことはやだね。簡単に拳で決着つけようや」

「話し合いで解決出来ないのか？」

「イヤだ」

尚も食い下がる高崎先輩をたったの一言で振り払い、あたし達の方へと駆け出して来た。

高崎先輩はやれやれとして、深くため息をつく。

「仕方がない、やるしかないのか……」

高崎先輩は稲葉先輩を迎え撃つべく、腰を落として懷に手を入れた。

次回に続く！

あれ？ あたしの出番は！？

第十三話 女は下らないことで恐ろしい口喧嘩をするものらしい……（後書き）

まだまだ生徒会長争奪戦は続きます!!……………予想外に長くなってしまった……………

第十四話 戦いの結末と校長室（前書き）

今回で、微妙に消化不良ながら生徒会会長争奪戦編は終了です。…
…長かった……。

第十四話 戦いの結末と校長室

上には上がいるものだというのが、今回ばかりはそれどころじゃなかった。つまりは敗北だった。どうしようもないくらい惨敗だった。橘先輩の動きが見えないわけでも読めないわけでも無い。むしろ、直情的な闘い方をする橘先輩の動きは読みやすかった。

ただ、そのスピードとパワーは桁違いだった。力は沙雪さんには遠く及ばないだろうが、スピードは沙雪さんの上を行く。

その上、体力だけで闘う沙雪さんと違い、武術のマスターらしく、体の運びに無駄がなく隙が少ない。更に急所を的確に突いてくる正確さも持っている。

僕としては、どうして未だに自分が立っていられるのかが不思議で、不可解だった。

「……よく耐えますね。普通の方なら三分は前に屍になっているに」

橘先輩は感嘆のような呆れたような声を上げる。ていうか屍って怖えよ。

「僕も不思議ですよ。はっきり言って全てにおいて惨敗してるのに、どうして急所を外せるのか、……未だに立っているのか」

もう何十発のパンチをもらったか分からないが、どれもこれも致命傷には至らず、いたずらに苦痛を増したただけだった。

「こんなに手応えのある相手は、久しぶりです」

橘先輩は楽しそうに口の端を吊り上げた。

……冗談じゃない。これ以上やったら本気で屍になりかねない。何か、何か良い手は無いものか……。

「この辺りで休戦にしませんか？ これ以上は本当に死にかねないですし」

「ええ、いいですよ。貴方が白旗を上げて降参してくださるのなら、ね」

「僕、白旗は持っていないですよ」

「予想以上に面白い方ですね。貴方は」

橘先輩は軽やかに笑った。僕もつられて引きつった笑みを浮かべる。
「では、そろそろ沈んでくださいね？」

橘先輩は緩んだ空気を一瞬で引き締め、僕との距離を一足で詰める。
橘先輩の放つ顎を狙う拳を紙一重でかわし、同時に襲い掛かるレバーブローを肋骨に受けさせた。

激痛。

「ぐあっ……！」

たまらず僕は片膝をつき、橘先輩は僕の目の前で悠然と笑う。

「私の勝ちのようですね。ではお休みなさい」

そう言って僕の首筋目掛けて手刀を振り下ろす。

そう、これ待ってたんだっ！

僕は橘先輩の手刀を左腕で受け止め、橘先輩の顎に軽い拳を撃ち込んだ。完全に油断仕切っていた橘先輩は、なすすべもなくそれを受け、地に崩れ落ちた。

「体が、言うことを聞かない……！？」

橘先輩は必死に体を起こそうとするが、全く起き上がることが出来ない。

僕は痛む体に鞭を打ってようやく起き上がり、橘先輩を見下ろした。

「今回は僕の勝ちですね。しばらくすれば動けるようになりますので安心して下さい」

僕はそう言ってきびすを返して、高崎先輩と沙雪さんの元へと向かう。後ろからぎり、と齒が擦れる音がしたが、聞こえなかったことにした。

僕は自分の目が信じられなかった。いや、信じたくなかった。だ

って、目の前の惨状があまりにも理解不能だったから……。とりあえず、僕の目に映っていることを簡潔に描写しよう。いや、簡略化して描写することにする。

緒方先輩と高崎先輩が折り重なるようにして倒れていて、その上に完璧に無表情な沙雪さんが座っている。以上。

え？ 分りにくい？ まあ、推測すれば、何らかの原因によってぶち切れた沙雪さんが二人を完全に伸してしまったっていうこと。こうなってしまった沙雪さんは、非常に扱い難い上に凶暴で非情だ。命を大切にしたい僕としては、触らぬ神に祟りなし、と行きたいところなのだけど……。

僕はとりあえず全てを諦めて、沙雪さんに声を掛けることを決意した。

「あの……、沙雪さん？」

「……朋」

沙雪さんは無表情なまま、僕の方へと視線を向ける。

マズいッ！ あれは獲物を狩る虎とかライオンとか豹とかの、ネコ科の肉食獣系統の目だッ！ 狩られる前に逃げ……。

逃げようと振り返ると、そこには既に沙雪さんが居た。こんなしやうもないことに縮地（または瞬間移動ともいう）まで使うとは……。本気でおキレになっていらっしやる……。

沙雪さんはゆっくりと口を開いた。

「朋……、何をそんなに怯えているの？」

「いいいいえ！ おおお怯えてなんかいませんよ！？」

ガタガタ震える体と声は、どうしても騙すことなんてできやしませんでした。

「そそそれより沙雪さん！ そろそろ正気に戻って!!」

沙雪さんは無表情のまま、それでも可愛らしく小首を傾げ、

「あたしはいつも正……き……」

そのまま地面に崩れ落ちる。僕は慌てて沙雪さんを抱き止めた。規

則正しい吐息が僕の頬を優しく撫でた。

「なんだ……、疲れて眠っただけか……」

僕は安堵のため息をついた。とりあえず沙雪さんが無事だったことに。大半は僕が沙雪さんに殺される羽目にならなかったという安心で。

僕は沙雪さんを背負って、何か世紀末覇者とでも対峙したかのような顔をして気絶している高崎先輩を引きずって校長室へと向かったのだった。

〳その頃の運動部連合盟主〵

三朝葵は焦っていた。どうしようもなく焦っていた。自分が何処にいて、何処に向かっているのかさっぱり分からないから。つまりは迷子というやつだ。

「どうしよお〵。迷っちゃったあ〵」

しかし、その言動からはどうも危機感を感じられない。いや、それは彼女の幼い見た目のせいだろう。

145cmに届かない小さな体、ぱっちり大きな丸い目、ウェーブのかかった栗色の髪を頭の両脇で縛っているその姿は、良くても中学生、下手をすれば小学生に見間違えてしまう程に幼い。

つまりは可愛らしくしか見えないと、そういうことだ。

「あれえ？ 葵、何をすれば良かったんだっけ？」

三朝葵はあろうことか目的まで忘れてしまったらしい。彼女は難しい表情から一変、笑顔を浮かべる。

「分かんないから部活に行こ〵」

そのまま体育館へと、足取り軽く向かって行ったのだった。

僕は校長室の前で、ごくりと唾を飲み込んで決意を固める。校長の正体を知る決意を。

別にかしこまる必要なんてこれっぽっちも無い気はしないでも無いのだけれど、何か緊張する。が、行動しないことには何も始まらない。僕は思い切って校長室の扉を開け放った。

「失礼しま……す？」

そこには誰も居なかった。というか何も無かった。

何か高級そうなソファーとか、何か高級そうな机とか、やたらと高級そうな椅子とか、鷹の剥製とか、馬鹿でかい金庫とか、歴代校長の写真なんかも全く無かった。天井も壁も床も白い、窓さえない白の部屋。それだけ。

僕が呆然と立ち尽くしていると、

『君が今回の生徒会会長かね？』

校長の声が部屋自体から響いた。僕は目を見開き、しかし平静を装って質問に答える。

「僕ではありません。生徒会会長はこれです」

僕はそう言って引きずっていた高崎先輩を白い部屋の真ん中に捨てた。

『ほう……、今回はそやつか。……滝川朋くん。そなたなら面白くなっただろうにのう……』

「……っ！？ どうして僕の名を……？」

『俺はこの学校の校長で理事長じゃ。生徒全員の顔と名前は覚えておる……とは言えんな。そなたは特別じゃ』

「特別……？」

妙に低いような高いような声はボイスチェンジャーを通していうで、ほとんど校長の意図を読むことが出来ない。

僕は沙雪さんを背負い直し、警戒を強める。いつでも逃げられるように。

『そんなに警戒せんでもいいじゃろう。別に取って食いやせん』

「……顔も見せない相手を信用出来ると思いますか……？」

『これは手厳しいのう……』

校長の声は幾らか焦ったような調子。僕はきびすを返す。

「では、用事は済んだようなので」

『ああ、一つ質問があるのじゃが』

「……」

僕は校長の質問を聞くために足を止めた。

『俺がそなたの前に顔を出したとしたら、信用してくれるかのう？』

校長の少し緊張したような問い。僕は少し考えて、

「そうですね、貴方の人柄次第でしょう」

僕は校長の答えを待たず部屋を後にし、保健室へと向かう。

今日は何て疲れる一日だったんだろう……。

そう心の中で愚痴をこぼしながら……。

第十四話 戦いの結末と校長室（後書き）

今回で学校編は終了です。沢山の捨てキャラを生み出し、イマイチ納得の行かない終わりだったかと思いますが、仕様です。納得行かないのがこの作品のテーマです（嘘）

それはそうと、最近っても一週間ほど前の話なんですが、この話を読んだ友人に『ありきたり』という評価を頂きました。結構シヨックだったかもしれません。この話を打ち切って新連載始めようかな？って考えるくらいに。皆さんはどうお考えでしょうか？微妙に気になってます。感想とかで書き込んでいただけると嬉しいです。

第十五話 帰って来た狼男な屋敷の最後の住人（前書き）

これで最初の構想にあったキャラクターを全て出すことが出来ました。ようやくいつでも征服編をスタート出来る……！

第十五話 帰って来た狼男な屋敷の最後の住人

帰って来た。長く苦しかった修行生活を終え、俺はようやく幽霊屋敷へと帰って来た……！

おっと。あまりの嬉しさに自己紹介を忘れていたな。俺の名はジエイク、ジエイク・ロスフォールだ。俺はワーウルフ、日本語では確か狼男だったか。満月を見ると狼に似た怪物に変身するあれだ。

容姿は……、人混みの中でも頭一つ出る長身で、髪は銀の短髪をオールバック風味にワイルドに固めてる。目はブラウンで切れ長、満月のときは金色になる。顔は……そうだな、彫りの深い北欧系の色男って感じだな。

まあ、俺の自己紹介はどうでもいい。名前さえ覚えてくれればな。とりあえずは俺の帰還を仲間達に伝えなければなるまい。

俺は屋敷の門に据え付けられたチャイムのボタンを押した。

カーン

西洋風の鐘の鳴る音。なんて懐かしい音だろう。確か、そう。半年くらい前に聞いたきりだな。

十五秒程して、屋敷の中から黒ずくめの線の細い男が姿を現した。俺は右手を上げて気さくに声をかけた。

「よお、久しぶりだな」

アルは小首をかしげて、

「はあ？ どちら様でしょうか？」

あろうことかそんなことをのたまりやがった。

あ、冗談ね。

俺は失笑を浮かべた。

「アル、お前に冗談は似合わねえぞ？」

「は？ 冗談も何もなく初対面だと思うのですが……。というか私の名をどこで知ったのですか？」

アルは本当に何も分からないというような表情だ。オイオイ、冗談だろ？

「あのなあアル。そういう意地っ張りはカッコ悪いぜ？」

「あの……。貴方は本当に誰です？」

アルは段々ウザく感じてきたのか眉間に皺が寄ってきている。ちょっと待てよっ！！ 半年で人のこと忘れるなんて有り得ないだろ！？

「俺だよ、俺！ 半年前に修行に出たジェイク！ ジェイク・ロスフォールだッ！！ ほら、ワーウルフの！！」

アルはもう、うんざりといった風にしっしっ、と犬にするように手を振り、

「妄想はほどほどにしたほうがいいですよ？ では、貴方のような妄想たくましい方に付き合っている暇は私にはありませんので」
屋敷の方へ引っ込んでいく。

「お、おい！ アル！ てめえ、ふざけてんじゃねえ！！ おい！！」

アルは俺の叫びなんて完全無視で屋敷の中に入って行った。

「マジかよ！？ ありえねえだろ！！」

俺は屋敷に向かって悪態をつく。

あの野郎、絶対に確信犯だ……。俺を蚊帳の外に置いて何企んでんだ？

俺は腕を組んでしばらく考えたが、頭の回らない俺に何かに気付く筈もなく、直ぐに諦めた。

「まあ、俺にゃあ関係ない話だわな」

俺は屋敷の門の前にどつかりと腰を下ろした。沙雪の奴はどうか分からねえが、朋殿ならアルの野郎の不正を暴いてくれるだろう。なら、とりあえずは安心だな。ま、それまで寝て待ってるか……。

俺は門に背を預け、ゆっくりと瞼を下ろす。すると、今まで感じなかった疲れが津波のように押し寄せ、俺の意識は夢へと旅立った。

僕は屋敷の前で硬直していた。それというのも、屋敷の門にあの男がもたれかかって眠っていたからだ。

そいつは、僕がこの屋敷に来たときに僕を全殺しにする寸前までいった狼男。名はジェイク・ロスフォール。バーサーカーの称号が似合いまくりの無骨な大男だ。

あの時、偶然にも死なずに（無傷で）僕が勝利して、半ば追い出すようにして修行に出したジェイクがもう戻って来ようとは……。

僕は戦慄を感じて背筋を震わせた。

「沙雪さん……。今まで短い間だったけど、楽しかったよ……」

「どうしたの！？ いきなりお別れ!？」

「僕はその馬鹿犬に殺されて天に召されるから……」

「ああ、それね」

沙雪さんは合点がいったように手を打って頷く。僕はこの世の終わりのように天を仰いで涙を流した。冗談とかじゃなくて、本気で。

沙雪さんはそんな僕をケラケラと軽く笑い飛ばした。

「大丈夫よ。一回勝ってるんだから、また勝てるよ」

「……そうだったらいいのにね……。僕はその馬鹿犬の一発でも貰ったら、それだけでミンチみたいになるから……」

「？ 全部避ければいい話でしょ。そういうの、得意だね？」

簡単そうに言う沙雪さん。僕は深く、深くため息をついた。

「避けるのは簡単だけど、僕の場合は集中力が一瞬でも緩むと……」
「ふーん。まあとにかく起こそうよ、それ」

沙雪さんはそう言って馬鹿犬、ジェイクを指差した。僕は一瞬迷うが、ゆっくりと頷いた。沙雪さんは僕に頷き返して、あろうことがジェイクの鳩尾に思い切り蹴りを入れやがった!!

「げふうっ!？」

油断していた、もとい眠っていたジェイクは完璧な形で蹴りを貰い、大きくせき込んだ。

「てめえ、何しやが……って沙雪じゃねえか! 久しぶりだな!」

「……そうね。あたしは会いたく無かったけど」

「おいおい、寂しいこと言ってくれるな……」

ジェイクは鳩尾を蹴られたことなど忘れてうなだれた。

僕は、本当は嫌だけど、ぎこちなくジェイクに声をかけた。

「や、やあ、ジェイク。修行は済んだの?」

「おお、朋殿! 言われたとおり月一でヒグマと格闘してきたぜ!」

ジェイクはボディビルダーのようなポーズをとって筋肉を見せ付ける。……着てるのがスーツだから良く分かんないんだけど。

沙雪さんは僕に耳打ちをした。

「ヒグマと格闘させたのって本当?」

「うん。いくら力馬鹿犬でもヒグマと闘ったら死ぬかなって」

「……朋って、黒いね……」

「何を今更」

沙雪さんは疲れたようにため息をついて、ふらふらと屋敷の中へと入って行った。

はて? 何か沙雪さんを疲れさせるようなことを言っただろうか?

僕が本気でそんなことを考えていると、ジェイクが思い出したように僕に泣きついた。

「そうだ、朋殿お。聞いてくれよお」

僕は鬱陶しくてジェイクを振り払ら……えなかった。つまりは自分の非力が全て悪い訳で。

「ジェイク、離れてくれないかな? ウザいから」

「うざっ!？」

ジェイクは相当ショックだったらしく、がくりとうなだれた。いちいちオーバーな奴だな……。

が、ジェイクは直ぐに立ち直った。

はやっ!!

「でな、帰って来たらよ。アルの奴が、かくかくしかじか……」

「ふんふん、そんなことが……って、かくかくしかじかで分かるかッ!!」

「しょうがない人だな、朋殿は。仕方ない。ちゃんと教えるから一回で聞けよ?」

あれ? おかしいよね? かくかくしかじかで全部分かる人間なんて、そういないと思うんだけど。ていうかいらないよね。

僕の心の抗議は完全無視で、ジェイクの回想は始まった。

―五分後―

「……ってわけなんだが、どうにかしてくれねえか?」

「あー、そういうこと……ね」

まあ、つまりは犬と猫は相容れないものっていうかなんていうか……。

僕は最高に難しい最適な答えをジェイクに授けることにした。

「簡単なことだよ。ジェイク、君がアルを仲間だと思っているから彼が嫌がるんだ」

「?」

ジェイクは何のことか全く分からないようで、頭の上に複数の?マークを浮かべている。

……どうやって浮かべているんだろ……?

それはさておき、僕は言葉を続ける。

「まあ、つまりは猫であるアルの習性と狼の君の習性とは全く違っていること。具体的に言うと、アルには群意識とか仲間意識とかが薄いんだ。だから君の馴れ馴れしくまとわり付きがちな性格は嫌がられる」

「はあゝん？」

ジェイクの頭の上の？マークは益々増えていく。僕は苦笑して屋敷に足を向けた。

「まあ、いつも通りにすればいいよ。そうすればアルも無視できないから」

「あ、それもそうだな」

僕とジェイクは並んで屋敷の敷地を歩いたのだった。何となく命を拾ったような清々し……、

「ああ、朋殿。来週の日曜日に手合わせしような」

拾った命は偽物で、全てが崩れさったのでした……。

第十五話 帰って来た狼男な屋敷の最後の住人（後書き）

これで今年は終わりですね。『魔王の日々 〱現代版〱』を応援してくださった皆さん、ありがとうございます。

第十六話 罰ゲーム的な売店のおばちゃんのおまけ（前書き）

すみません。前回の更新から非常に日が開きました。これから早く書けるといいなあ。

第十六話 罰ゲーム的な売店のおぼちゃんのおまけ

気まずい。物凄く気まずい。今すぐ北風が吹き荒ぶ冬の屋上から逃げ出したい。

つい先程からいつも静かな屋上は、いつもと違う方向性で静かになっていた。沈黙が重く僕の背にのしかかり、冬だというのにひどくねっとりとした重苦しい空気が僕を責める。

全ては僕の隣で黙々と弁当をつつく剣道少女、奥寺里香のせいだった。

事の起ころいは、昼休みの始まった二十分前のこと……。

『きーんこーんかーんこーん』

授業の終了と共に昼休みの到来を告げるチャイムが、学校中に鳴り響く。教室のざわめきは最高潮に達し、教壇の上に立つ数学教師（三十四歳、独身）は、ため息をついてチョークを置いた。

「今回はこの次から始め……」

『ありがとうございますー！！』

数学教師が全てを言い終える前に、クラスの男子のほぼ全てが勢い良く立ち上がり、そのまま廊下へと飛び出していった。

数学教師は惚けたように駆け抜ける生徒達を見送って、大きくため息をつく。

「……来週、小テストにしますから。彼らには絶対に教えないでおいてください」

教師は問題発言を残して、いつもより二回りは小さい背中で教室を後にした。

……先生、ドンマイ。雑魚生徒達、自業自得だよ。

僕は半ば本気で、静かに黙祷を捧げた。

……数学教師の勝ち誇った笑みと戦死した雑魚生徒達が織りなす地獄絵図が今にも瞼の裏に見えそう……。ていうか見えた。

僕はげんなりしながら、弁当を探して鞆の中を漁る。……漁る。
頭から血の気が引いた。

「ない……」

僕はがくりとうなだれた。鞆の中にアルお手製の絶品弁当が無かったのだ。

帰宅部の学生にとっての唯一の楽しみと言っても過言ではない、昼食。それが、無い。どうにも、無い。

なんという不条理。なんという不公平。なんという、仕打ち。

「この世に神はいないのかーッ!？」

僕は叫んだ。有らん限りの声量で。喉が破れん程に。

「なに馬鹿なこと言ってるの」

その言葉が耳に入ると同時に殴られた。

沙雪さんだった。

ぐーだった。

……痛かった。

僕は涙目になりながら沙雪さんを小さく睨む。

「痛いじゃないか、沙雪さん」

「朋……。君、今の行動でファンクラブの会員が三十人は減ったよ……」

「多いよ!?! 教室には二十人もいないでしょ!?!」

僕の突っ込みに沙雪さんはこれ見よがしに大きいため息をついた。

「朋をストーキングしてる会員が三十人、そのみんなが幻滅したろ

うから」

「怖っ!!」

いくら油断しているとはいえ、剣道家の端くれである僕に気取られずに三十人のストーカーがいるなんて!!

僕はきよろきよろと教室のあちこちに視線を走らせる。……どこにも隠れている人間の気配なんて無い。

まさか、眼力とか索敵能力とかが鈍ったのだろうか。それはまたゆゆしき……、

「ま、全部冗談だけどね」

……冗談かよ。

僕は一気に脱力した。一日のエネルギーを使い切ってしまった気分だ。そしてお腹が空いた。

「ねえ沙雪さん。僕にお弁当を」

「いや」

即答。質問する前に即返答。素晴らしい反射速度だった。

僕は軽く肩を落とす。

「まあ、そうだよ。……じゃあ、僕は購買部という地獄に身を投じるよ……」

僕は涙を溜めて上目遣い、体はしなを作ったの渾身の捨て犬ポーズ！これに同情しない女の子なんて、

「頑張ってね」

いた。

………冷たいなあ、沙雪さん。

行くと宣言してしまった手前、止められないなら行くしかないじゃないか。

僕はとぼとぼと教室を後にした。戦場へと身を投じるため……。

で、簡単に言えば既に戦争は終わっていた。購買部の棚はほとんど空っぽで、購買の守護神のおばちゃんはタバコなんぞをぷかぷか吹かしていた。

僕はうなだれておばちゃんに話し掛ける。

「おばちゃん、なんか食べられる物とか残ってない？」

おばちゃんは僕をぎろりと一睨みして、ぶっきらぼうに告げた。

「あるよ」

「ほんとっ!？」

僕の未来に光が差し、

「わさびパンと辛子明太パンだけど」

その光は絶望の紫の光でした。

「それでもいいよ……」

お金を払いわさびパンと辛子明太パンを受け取りながら、僕は涙を流してこの世の不条理を嘆いた。

おばちゃんは僕を憐れんで、おまけにジンジャーエールをくれた。
……死ねと言っているのでしょうか……？

僕はぎこちなくお礼を言って購買部を後にし、屋上へと向かうことにした。なんとなく教室には帰りたく無かったから。僕のボディガードのような仕事をしている沙雪さんを少し困らせてやろうと思っ

思えばその選択が間違いだった……。

扉を押し開けると、屋上には人っ子一人いなかった。まあ、冬に好き好んで外でご飯を食べようとかいう頭の狂った人間もあまり居ないだろう。

僕は適当に、フェンスを背もたれに屋上の端の方に腰掛け、袋からジンジャーエールだけ取り出した。わさびパンと辛子明太パンなんて食えるか!!

「昼は抜き、か……」

僕はうなだれながらジンジャーエールの蓋を捻り、それを喉に流し込んだ。

炭酸が喉ではじけて、それがまた美味しく、寒さを引き立てた。

「あほらし……」

僕はおかしな意地を張っているのが本当に馬鹿馬鹿しくなって来て腰を上げようとするのと同時に、錆びた扉が悲鳴のような音を出した。

僕以外にこんな場所に来る物好きがいるのか。

僕はその人に興味を感じて、浮かした腰を下ろした。

扉が重くゆっくりと開き、お互い顔が見えたところで二人とも硬直した。

「なっ……、滝川朋！　どうしてここに！？」

「指を差すな、奥寺里香……。それに、僕がここにいて何が悪い。

少し空に近いところでご飯を食べたかっただけだよ」

焦っている里香を見て少し冷静になった僕は、冷ややかに返す。それでも多少おかしなことを言っている気がしないでもないが、気にしないことにした。

どこか滅茶苦茶なように説得力のあるその言葉は、里香を怯ませるには十分だったらしい。里香は次の句を継げず押し黙った。

「くっ……、今は竹刀も無いし勘弁してやろう。……私もここで食べたいのか？」

「ん？　いいけど。ここは僕の部屋ってわけでも無いし」

「ありがとう」

里香はいつもの刺々しい表情から一転、棘のとれた柔らかい表情を浮かべた。

ドキリとする。柄にもない話だけど、里香が物凄く可愛らしく見えた。

そして里香は、何を間違えたのか僕の隣にちよこんと腰をおろし、弁当の包みを開いた。

なっ、なっ……何いー！？　どうして僕の隣に！？　もしやこれは心理作戦！　宿敵の隣でプレッシャーを掛けることによって僕を消耗させようというのかー！？

僕は押し黙ったまま、また里香は黙々と弁当を攻略し、ひどくゆっくりと静かな時間が過ぎて行くのだった。

という感じで回想終了。今のどうにも居心地の悪い状況に至るわけ。

僕はどうやってこの空気を打破すればよいのかと思案に暮れる――
I。

次回に続く。

第十六話 罰ゲーム的な売店のおぼちゃんのおまけ（後書き）

わさびパン……クリームパンのクリームをわさびに差し替えた罰ゲーム用の逸品。完食した人間は学校卒業まで神と崇められる。

辛子明太パン……パンの皮を被った辛子明太子。つまりは辛子明太子を薄いパン生地で包んだ逸品。辛子明太子は激辛を使用し、パン生地の使用によりなんとなくご飯には使いにくい。

ジンジャーエール……言わずと知れた強炭酸ジュース。辛いものを食べた後に飲むと、文字通り死ぬ。天国も地獄もなく無に帰す。

以上、作中の不思議食べ物紹介でした。

第十七話 滝川朋が去った後には（前書き）

遅くなりました。その上短いです。非常に短いです。申し訳ありません……。

第十七話 滝川朋が去った後には

「滝川朋、お前は どうして 剣を置いたのだ？」

長い、長い 静寂を打ち破ったのはこの 静寂を作り上げた張本人である奥寺里香だった。

……全く、口を開いたと思えばなんつー重い話題を……。

という かり香は何処で僕が剣道をやったってことを知ったんだろう？ 高校に入ってから 竹刀を一度も握ったことはないし、引越して来たから 今住んでいる地域じゃ 無名の筈なんだけど……。

「僕は 剣なんて一度も握ったこと無いけど？」

「とぼけるな！ 中学の同級生の剣道部で お前のことを知らないのは、どこぞの山奥の田舎者くらのものだぞ！」

「……僕って そんなに 有名？」

僕は 猜疑の目で 里香をじっと見つめる。里香は僕の視線を受け止められず、目を泳がした。

「……済まない、誇張しすぎた。私も お前と同じ街に住んでいた。だから、お前が練習試合百十数戦全勝しながら一度も公式戦に出場しなかったことも知っている」

「……そう」

まさか、僕を知る人間がこんな学校、僕の中学校周辺からは進学対象にさえならない 県外の無名校に、いるなんて思いもしなかった。

僕は大きく、大きくため息をついた。

「ぶっちゃけ、あんまりに情けなさすぎて非常に 恥ずかしくて話しにくいんだけど……」

「お前の事情など関係ない。さあ、話せ」

「……へいへい」

自己中も行き過ぎるといって清々しいもんだな、なんて思いながら、僕は やけくそ 気味に口を開いた。

「僕はね、才能が無いから剣を置いたんだ」

「……………は？」

里香は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。意外な言葉だったらしい。

……………僕にはその反応が意外なんだけど。

僕は他に語ることが無いから黙って里香の反応を待つ。里香は余程意表を突かれたのか、なかなかフリーズが解けなかったが、ようやく立ち直り激昂した。

「馬鹿を言うな！ 努力に努力を重ねてもお前のいる高みまで辿り着けぬ者も多いのだぞ！？」 才能があるくせに簡単に――」

「才能がある、だって？」

僕の小さな呟き。しかしそれは里香の激昂を収めるだけの迫力を有していた。

「僕が竹刀を振るってるところを見たことがないのに、どうしてそんなことが言えるのかな？」

「え？ 私は一――」

「それに、君は僕がその他大勢が絶対に届かない頂にいてって言ったけど、僕のは誰でも努力次第で辿り着ける。……手と足に潰れた豆に豆が重なるくらいに、毎日血反吐を吐くのが習慣になるくらいに鍛錬を積みめば、ね」

「それは詭弁だ！ 人には誰にも向き不向きというものがある！！」

「そう、それは君の言うとおりだね。ところで……、僕の中学生の頃の体育の成績を知ってるかい？」

「知るか！ そんなのは今はどうでも――」

「良くないんだな、これが。僕の体育の成績はいつも2。……ちなみに皆勤賞とってるから、僕」

「な………に？ それじゃ……」

「そう。僕の運動神経はほぼ0。単純な運動能力なら君に遠く及ば

ないだろう。……僕には才能が、無い」

「……………」

僕は語りたいことは全て吐き出し、里香は何も言えず、重苦しい沈黙が屋上にのしかかった。

里香は俯いて、弱々しい声で言葉を押し出す。

「しかし、それでもお前は強い。私はただお前に剣道をやって欲しい……」

いつもの凜とした雰囲気とは正反対の、今にも泣き出しそうな里香。

僕は小さくため息をついた。

「確かに、そんじょそこらの高校生には負けなくらい強いとは自負してるよ。ただ、伸びもしないものを未練がましく続けるほど暇ではないし、僕は日本中に誇れる才能を見つけなくちゃならない」
「それはどういうー」

きーんこーんかーんこーん。

そんな時、昼休みの終了を告げるチャイムの音が校内に鳴り響いた。

僕はさっと立ち上がり背中越しに、

「この話はこれで終わりだ。次に会った時は、また問答無用で斬りつけてくればいいよ。じゃね」

そうして、そそくさと教師へと急いだ。

そうして奥寺里香は屋上にぽつんと取り残された。先程までいた滝川朋の代わりに、隣には購買部のビニール袋が風に靡いていた。

「私に、捨てろと言うのか……?」

里香の朋へと抱く殺意は一層苛烈なものへとなった……。

第十七話 滝川朋が去った後には（後書き）

次回こそ、次回こそは……。

第十八話 沙雪さんの暴走と怪獣大戦争

暖冬だと叫ばれてる最近にしてはやたらと寒い今日は、火曜日だ。学校の授業に精神を削られ、また毎日が平和で欲求不満が溜まっていて暴走しがちな沙雪さんを押し留めることに肉体を削られ、何となく満身創痍な僕はうなだれながら、よたよたと家路を辿っている。

「大丈夫？　なんか疲れてるみたいだけど……」

「それを君が言うの……？」

「？」

僕の隣にはいつものごとく沙雪さんがいる。今は至極普通で、僕の心配なんかしっちゃってます。

……この疲れの半分は君のせいなんだけどね。

というか、暴れたいならアルとかジェイクとじゃれてればいいよ。うな気がするけど、沙雪さん曰わく、アルは手を抜くからつまんないしジェイクは屋敷が無くなりかねないから止めとく、ということらしい。

なんというか、うん。屋敷のメンバーって相当アンバランスだね。なんていうか、戦闘要員の連携は皆無だしジェイクとアルの仲は壊滅的に悪いし。

何となく屋敷の今後と魔王という役職の必要性に疑問を抱きながらため息をついた。

「なんていうか、前途多難だなあ……」

「？　どうしたの？」

「……ハア……」

僕は沙雪さんをちらりと見て、これ見よがしにため息をついた。沙雪さんは眉間に皺を寄せる。

「何よ。感じ悪いなあ」

「沙雪さんを見てるとどうも疲れが……」

「それってどういう意味かな？」

「そのまんまの……ぐっ!？」

沙雪さんの右手が僕の首を掴み、そのままぎりぎり締め上げ始めた。

息がつ、苦し……。

沙雪さんはやりと口角を吊り上げた。その瞳は真紅に染まっている。

「朋……、疲れるってこういうことかな？」

「くる……し、おろ……し、て……」

僕の声など聴こえないかのように、いや実際聴こえていないのだろう、僕の首にかかる力は一向に弱まる気配がなく、むしろ強まってさえる。

沙雪さんは完全に正気を失っていた。

沙雪さん達、鬼という種族は基本的に人間と同じ生態の亜人である。その筋力、俊敏性は人間のその数段上だが。

人間の上位種といっても過言ではない鬼であるが、彼らには大きな弱点が存在する。それは欲望の衝動が激しく、理性が弱いということ。欲望が程良く満たされていればそれに悩まされることは無いが、欲望が満たされない状態がある程度続くと……、今の沙雪さんみたいに見境なく欲望を満たしに走るのだ。

どうにか、どうにか沙雪さんを止める方法は無いものか……。つて不味い、意識が、遠、のく……。

「あ、良いこと思いついた」

「ぐあっ……」

沙雪さんは突然と手を離れた。意識が半分飛んでいた僕はコンクリートに叩き付けられた痛みで無理矢理に意識を覚醒させられる。

沙雪さんは僕に目を向け、にっこりと微笑んだ。

「朋は闘えるんだったよね? ……あたしとじゃれ合ってみない?」

「嫌です」

拒否。断固拒否。地面に這い蹲りながらも、僕はきっぱりと断った。性能的に完全に劣っている僕は一瞬で肉塊に変えられるに違いない。いや、何か断ってもあんまり変わらないような気もするけれど、何とか活路を探す。

「お、朋殿。どうして地面に這い蹲ってんだ？ 沙雪もなんでそんなに殺気立ってんだ？」

探すまでもなく、活路は転がり込んできた。

「良くやった。誉めてつかわすぞ、ジェイク」

「朋殿、キャラ変わってんぞ？」

「気にするでない」

僕はふらつきながらもゆらりと立ち上がった。キャラが変だって？

それは頭に酸素が行ってなかったであろう。

さて、沙雪さんをジェイクに襲わせて僕は逃げよう。一目散に逃げ出そうじゃないか。

「沙雪さん。今からジェイクとじゃれ合うことを許可する。被害は考えなくていい。思いっきりやってくれ」

「ホント！？ ……腕が鳴るわ……」

沙雪さんは愉悦の表情で構えをとる。ジェイクも楽しそうに、豪快に笑った。

「おお、いいねえ！ 俺もそろそろぶっ壊しまくりてえと思ってたんだ」

二人は親の敵でも見るかのように睨み合う。

僕はその隙に回れ右して一目散に逃げ出した。兎に角、二人の戦闘圏内から脱出しないと、いつの間にかミンチみたいになってるのが関の山だ。

と、後方で何かが爆発したような音がして、やたらと甲高い悲鳴が響いた。

聞こえない、聞こえないぞ!!

僕は心を鬼にして走り続けるのだった。

第十八話 沙雪さんの暴走と怪獣大戦争（後書き）

最近、コメディしてない気がします。どれもこれもネタが無いのが問題です。

こんな話を読みたい、なんていう要望がありましたらメッセージとかで送ってください。お願いします。

第十九話 滝川朋のお姉ちゃん（前書き）

最近更新が遅い＆不定期ですね。言い訳するとスランプなんです。言い訳しないとすみません、と平に謝るしかありません。

……猫小判の戯れ言は軽くスルーして本編をどうぞ。

第十九話 滝川朋のお姉ちゃん

「……ただいま」

「ただいま〜!」

僕と沙雪さんはいつも通りに、いや、僕はいつもよりだるそうに、沙雪さんはいつもより爽やかに帰宅を知らせる挨拶をした。

沙雪さんはこの前の乱闘が余程良いストレス発散になったらしい。ここ一週間程、ずっとこの調子だ。

ストレスと抑圧で暴走寸前の頃よりは断然よくなったけど、やっぱり僕が疲れるのは変わらない。……どっか遠くへ逃げてやろうかな……。

下らないことを考えながら玄関を見回すと、見たこともないカラフルな女物の靴が端の方にちょこんと寄せられているのが目に入った。

「あれ? 沙雪さん、友達呼んだ?」

「ううん。あんな趣味悪い靴履く友達なんていないよ」

沙雪さんも靴に、いや靴の持ち主に興味があるのだろう、じっと靴を見つめている。

しばらく靴を見つめる沙雪さんを見るでもなく眺めていると、彼女は何を思ったのか急に僕の方に顔を向けた。その表情からは微かな怒りを読み取れた。

「朋、もしかして貴方の知り合いかな?」

「……そうかもね。でもそうじゃないかもしれない。いや、そうじゃないと信じたい」

「?」

沙雪さんは僕の的を得ない発言に首を傾げる。僕は僕で腕を組んで自分の思考に沈み込んだ。

その靴の持ち主が本当に僕が思い描いた彼女ならば。僕がこの屋

敷を出ざるを得ない状況に追い詰めることが出来る人物がこの屋敷に確実にいることになる――。

「なんてね。彼女はそんな人間じゃない」

僕は自嘲気味に笑って溜め息をついた。

この靴の持ち主は僕の味方だ。敵の身内ではあるけれど、確実に僕の味方。彼女は僕の戦いをぶち壊すことが可能な、僕にとって天敵の位置にいる人間だけれど、信頼出来る味方だ。

「さ、いつまでもぼさっと突っ立ってないで上がろうよ沙雪さん」

「あ、うん」

僕は靴を脱ぎ、カラフルな靴の横に並べる。呆けていた沙雪さんは慌てて靴を脱ぎ捨て、それを揃えること無く僕の隣に並んだ。

僕は苦笑いを噛み殺して、沙雪さんと連れ立って居間へと足を向けた。

――とりあえずはどうしてここが知れたのか聞いたなさきや――

そして居間。そこでは僕の予想通りの人物が、ソファアに深く腰を下ろしケーキを頬張りながら紅茶を飲んでいた。傍らに立つアルの口元は若干ひきつっていた。一体、何個目のケーキなんだろうか？

僕は深々と溜め息をついて、その女性――我が姉――に仕方なしに声をかけた。

「やあ。久しぶり、姉さん」

ケーキを夢中で頬張っていた姉さんは、僕の声聞いた途端にガバツと顔を上げた。そして僕を視界におさめるとニコリと、何かを取り繕うように完璧な微笑を浮かべた。

「ええ、久しぶりね」

本人は取り繕ってるつもりだろうけど、全く取り繕えてない。だってほっぺに生クリームがついたままだし。

彼女は竜造^{りゅうぞう} 有里香^{ゆりか}。名字が違うけど、とにかく僕の姉だ。黒髪は腰まで無造作に伸び前髪も目が隠れるくらいの長さ。その向こうに揺れる漆黒の瞳は並々ならぬ意志を感じさせる。服装は黒いスーツで固めていた。

正にクールビューティーという名に相応しい容姿なのだが、その本質はお茶目さん一直線だ。………まあ、追々分かってくるので割愛の方向で。

僕は自分の頬を指差して呆れて言った。

「姉さん、ほった。生クリームついてるよ……」

「えっ、うそ!？」

姉さんは右頬を、生クリームが付いている反対の頬を弄った。

「姉さん、逆だよ逆」

「あははは……」

姉さんは顔を真っ赤にして頬の生クリームをすくってペロリと舐めた。………それが親父の怒りを買っているのだと分かんないのだからか？

「ねえねえ」

沙雪さんが僕の背中をちょいちょいつついた。僕は振り返る。

「どうしたの？」

「その女、朋のお姉さん？」

「ああ、うん。紹介してなかったね」
すっかり忘れてたよ。

僕は姉さんを二人に紹介した。

「彼女は僕の五つ上の姉さん」

ついでにと、今度は沙雪さんとアルを姉さんに紹介する。

「黒いスーツの彼がアル、僕の隣に立っているのが沙雪さん。二人ともこのお屋敷で部屋を借りてる友達だよ」

僕が紹介し終わると、姉さんが丁寧^{ていねい}に頭を下げる。それに少し遅れ

てアルも丁寧に頭を下げ、つられて沙雪さんも雑に頭を下げた。

「有里香です。弟がお世話になってます」

「そ、そんなことないです。あたしの方こそお世話になりっぱなしで……」

「アルフレッドです。いつも朋君の世話をしています」

アル、君に社交辞令とか一般常識とかは無いのか？ 普通、こちらこそお世話になってます、とか言うもんだろ。姉さんは姉さんで気にしてないみたいだし。沙雪さんを見習……って何か知らないけど萎縮してるだけみたいだね、沙雪さん。

萎縮している沙雪さんをじっと見て、姉さんはいやらしい笑みを口元に浮かべた。

「へえ、朋の隣にいる可愛い女の子、彼女さん？ 一年も経たない内にもう彼女がいるなんて、朋も隅に置けないわね」

「ええっ?!」

沙雪さんは素っ頓狂な叫び声を上げた。顔は真っ赤。それを見た姉さんは更に笑みを深くする。

僕は今日何度目かの深い溜め息をついた。

「違うよ姉さん。沙雪さんは彼女なんていう大層なものじゃない。ていうかね、僕の近くにいる女の子は僕の彼女だって決めつけるのは止めてくれないかな」

「ええっ!？」

今度は沙雪さんの悲しみの叫び声が上がった。

「絶対零度の完璧あっさり瞬間否定!？ ああ！ この子はなんて冷めたつまらない子供に育ってしまったのでしょう。お姉ちゃんは悲しいわ……」

姉さんはおおげさに、口元を抑えよよと泣き真似をした。黒スーツのクールビューティーな外見でそれはあんまりにアンバランスだ。「そんな真面目に否定しなくても……」

沙雪さんは嘘とか冗談ではなく、本気で泣き崩れた。

アルは僕を冷たい目が、姉さんは何だか良くわからないにやけた

視線が僕に刺さっていた。

「あのねえ……、嘘ついて勘違いさせて希望を持たせるよりは、現実を突きつけてあきらめさせた方が良くはないか？」

なんて僕には言えるはずもなく、僕には二人の視線と沙雪さんのすすり泣く声を苦笑いで受け流すことしかできなかった……。

第十九話 滝川朋のお姉ちゃん（後書き）

次回は朋くんの家族事情が垣間見ることが出来るかもしれませんが。かもしれない、というのはプロット無しで日々の勢いに任せてこの作品を書いているに他ならないからです。無謀ですね。

ちなみに次回の更新日はいつものように未定。感想頂けると早くお目にかかれるかも……？

第二十話 魔王様と家庭の事情（前書き）

今回、いつもより短いです。そしてシリアスです。

第二十話 魔王様と家庭の事情

「で、姉さん。どうしてここが？」

泣いてる沙雪さんを部屋に下がらせ、僕は唐突に切り出した。まあ、聞くまでもなく大体の想像はついているけど。

姉さんはアルに入れ直させた紅茶を一口含む。

「お父さんに内緒で、うちの情報班動かしちゃった」

「やっぱり……」

はあ、と僕はこれ見よがしに深い溜め息をついた。

「それじゃ父さんにこの場所はバレてないんだね？」

「そうね。そもそも父さんはもう貴方を探す気なんて無いみたい」

「へえ……」

僕は気のない返事を姉さんに返した。

それにしても、あの男が諦めるなんて意外だ。蛇みたいに狡猾でしつこい質だと思ってたんだけど。少し再評価する必要がありそう。ほんの、ほんの少しね。

姉さんはティーカップを置いて、真剣な表情で僕を見つめる。少し怖いよ姉さん。

「ねえ、家に帰って来る気は無い？ あの子もあなたの帰りを待ってる」

姉さんの口から出た言葉は、中学入学と同時に家を出てから、何度となく問われた言葉。姉さんの悲しげな表情を見ると、妹が声を押し殺して泣いているのを想像すると思わず頷いてしまいそうになる。

それでも僕は、鋼の意志でその思考を心の隅に押し込めた。

「ごめん、姉さん。僕は家には帰れない」

姉さんは僕の目をじっと見つめ、小さくため息をついた。

「……………そう言うと思ってたわ」

「姉さん……」

予想通りと言った姉さんの表情はとても寂しそうで、僕も思わず俯いた。

僕の顔を覗いた姉さんは苦笑いを浮かべた。

「そんな顔しないで。あなたの選択は正しい」

姉さんは続ける。苦しそうな表情で。

「でも、でもね。正しい選択がいつも最良とは……限らないから」
「分かってる、分かってるよ姉さん。だからー」

僕はその次に続く言葉を繋げられなかった。それを言ってしまったら、姉さんとはこれっきり会えなくなってしまいそうだったから。今まで築いてきた全てが、水泡に帰してしまうから。

僕らの上に重くのしかかる空気。僕はそれをはねのけるように、さっと立ち上がった。

「そういえば姉さん、今日はどうするの？ 泊まっていくんなら部屋を用意するけど」

「いえ、もう帰るわ。名残惜しいけど、これ以上ここにいと帰れなくなっちゃうから」

姉さんは微笑んでやんわりと拒絶し、立ち上がった。

「そっ、か。それじゃあ玄関まで送るよ」

「そうね。お願い」

僕と姉さんは連れ立ってリビングを出て玄関へと向かった。

玄関先にはいつの間にか黒塗りのBMWが止められていた。姉さんと僕が屋敷から出ると、運転席から背広姿の初老の男性が恭しく礼をして後部座席のドアを開いた。

姉さんは車に乗り込もうとして、思い出したように声を上げた。

「そういえば忘れてたわ」

「どうしたの？」

僕が問い返すと、姉さんは苦虫でも噛み潰したかのような渋い表情

で答えた。

「あのね。父さんは諦めたんだけどね、馬鹿兄弟共がまだあなたのことを気にしてるの」

「……………それで？」

「あなたのことをよっぽど消したがってるから、くれぐれも気を付けて」

姉さんの表情は真剣そのものだ。僕は小さく、ニヒルに笑む。

「姉さん。僕があんなボンクラ共に遅れを取るとでも？」

「ふふ、確かにね」

姉さんは純粹な笑みで返してきた。……………眩しい笑顔だ。

「じゃ、健康に気を付けるのよ。……………若松、出して」

「はい、お嬢様」

姉さんは今度こそ後部座席に乗り込む。若松と呼ばれた初老の男性男性は姉さんが席に着くのを確認してドアを閉めた。そして若松さんは口を開いた。

「坊ちゃん。貴方はいかがなさるおつもりですか？」

「……………何が言いたいのか？」

「いえ、貴方が滝川家にいらっしゃることで滝川は混迷を極めております」

その言葉は、胸に、グサリと、突き刺さった。

若松さんはそれに気が付かないのかそれとも無視しているのか、そのまま続ける。

「坊ちゃん、朋様は元々滝川をお継ぎになるためにいらっしゃった筈です。それなのに家を継がれることなく遊んでいらしている。これがどれだけお嬢様にご負担をかけているかお分かりですか？」

「……………」

「家をお継ぎになるにせよ、ならないにせよはつきりとして頂きたい。……………縁を切る、というのも一つの手ですぞ」

僕は押し黙ったまま、何も言うことが出来ない。考えてないわけでは無かった。だが、それは――。

若松さんは、

「それでは失礼します」

そう恭しく頭を垂れて車に乗り込んだ。

僕が呆然と立ち尽くしている間に、黒のBMWはするすると遠ざかっていったのだった。

世界征服の活動を始める前に、僕にはやるべきことがあるようだった。
――。

第二十話 魔王様と家庭の事情（後書き）

……………1ヶ月以上の間を開けての投稿です。その上短い……。本当にすみません。

今回、色々伏線張りまくりましたが回収するかどうかは未定。そして世界征服はどんどん遠ざかっております。魔王様は何がしたいのでしょうか。猫小判にもちよつと予想がつきません（オイ）

次回は恐らくはコメディイになると思います。

「コメディイはいらねえからシリアスとかバトルとかやりやがれ！」

という方は感想かメッセージの方へ激を送ってください。一つでもそういう意見があったらそっちにシフトしますのです。

第二十一話 緊急事態！？

「緊急事態！ 緊急事態です！！」

黒猫形態のアルが慌ただしく僕の部屋に転がり込んでくる。書き物をしていた僕は一旦、手を止めてアルに向き直った。

「どうしたんだい、アル？ 君が慌てるなんて珍しいじゃないか」

「私だって神ではないのですから慌てることだってあります！」

アルは乱れた息を必死で整える。僕はアルの息が落ち着くまで待つ。やがてアルは落ち着いたようで、重々しく口を開いた。

「ついに、ついに自衛隊がこの屋敷に向かって出動しました。時を同じくして、米軍もここに向かっております」

その報告に、僕は少しだけ目を見開いた。

「ふうん、自衛隊がねえ。日本の上層部は腰抜けばかりだと思っていたけれど、まだ骨があるのがいるらしいね」

「魔王様！ そのように暢気なことをおっしゃっている場合ですか！？ 早急に対処せねばならないでしょう！！」

アルが吼える。……ん？ 猫が吼えるって……。

少しだけおもしろくて僕は笑った。アルは僕が笑う姿を見て声を荒げる。

「笑っている場合では無いでしょう！ 早急にご指示を！！」

「君は面白くないのかい？ アルが吼える、っていうんだよ？ 猫は吠えないじゃないか」

「はあ？ 魔王様、何をおっしゃっているのですか？」

アルが、何言っただこのバカが、とか思っている表情をしていた。しまった、セリフ間違えた。

僕は一つ咳払いをして全てを誤魔化して、もう一度、威厳をもつて言う。

「アル、君は面白く無いのかい？ 自衛隊がしゅっ……」

「言い直すのですか！？」

「ちょっと、アル。ちゃんと言わせてくれないか」

「あ、すみません」

アルは呆れたように諦めたように、素直に頭を下げた。僕は威厳をもって口を開く。

「アル、君は面白く無いのかい？ 自衛隊が出動したということは、我々が社会にとって有害な悪であると認識されたということ。つまり、僕らは政府を倒す組織として正式に社会に認められたということさ」

「またしょうもないことで喜んでおられますね……」

アルは呆れたように大きくため息をついた。少しアルの態度が気になるけど、今は緊急事態。気にしないことにしよう。

「アルっ！ 屋敷にいる隊長クラスを全員呼び出して！！」

「承知いたしました」

アルは今までのおちゃらけた雰囲気吹き飛ばし、颯爽と僕の部屋から去っていった。

さて、僕も会議室へ移動するのだろうか。

会議室と銘打った客室の一つに、僕をはじめとする魔王軍の幹部が一堂に会した。

僕は上座に座り、会議室に集合した面々を見渡してから、おもむろに切り出した。

「さて、全員、ここに軍隊が迫っていることは聞いているね？」

全員が無言で頷く。その表情は真剣そのもの。しかし、一切の悲壮感もない。

僕はその頼もしい面々に満足に頷き、指令を送る。

「沙雪さん！ 貴女の鬼隊は先陣を任せます」

沙雪さんは、にやりと笑みを浮かべる。

「了解。他の部隊の出番が無くなるくらい暴れてくるね」

沙雪さんはそう言って会議室を後にした。僕はそれを見送って、次に目を向ける。

「レイ！ 君のヴァンパイア隊は夜まで待機。日が沈んだ後、敵本陣に奇襲！」

「りよ、了解です！」

レイはふらふらと駆け足で会議室から出ていった。……大丈夫かな？

僕は気を取り直してアルの方へと目を向けた。

「アルは後方支援と各部隊への連絡を担当して！」

「了解いたしました。猫又の神通力の真髓をお見せしましょう」

人間形態のアルは、颯爽と会議室から出ていった。

会議室には僕だけになる。

「ふふふ……。これから、僕の世界征服が始まるんだ……」

僕は一人、自分が支配した後の世界を想像してほくそ笑んでいた。

「……………って感じを僕は求めてるんだよ！」

僕は力説していた。アルと沙雪さんを前に。沙雪さんは非常に楽しそうに、アルは何言ってるのこいつという感じで聞いていた。

「あの、これで満足ですか？ 魔王様」

うんざりした様子で問うアル。あ、なんかムカつく反応。まだまだ聞きたいってことかなあ？

「いやいや、まだまだ僕の野望の話は続くよ」

「……………」

アルはこの世の終わりでも来たかのような絶望にどっぷり浸かった表情になった。分かりやすい奴だなあ。

「朋、ちょっと……………」

「え？」

僕がアルへの嫌がらせに新しい話をしようと思った矢先、沙雪さんが深刻そうな表情で僕に声を掛けてきた。沙雪さんのこんな表情、初めて見た……………」

沙雪さんは僕の前ににじりより、ずいと顔を近付けてきた。

「どうして……………」

「え？」

「どうしてなの……………!？」

「へ？」

沙雪さんは必死に僕に何かを訴えようとしている。その必死さが、尋常じゃない何かを感じさせて、僕は身構える。

かくして沙雪さんは言葉を紡いだ。

「どうしてあたしの出番があれしかないの!？」

「……………」

あんまりだった。あんまりだったから言葉を失った。ぶっちゃけどうでも良かった。どうでも良かったから、ぞんざいに返した。

「だって、沙雪さんの立ち位置ってそんなもんじゃない？」

「ひどっ!？」 この前まではメインヒロイン級の扱いだったのにつ
!！」

沙雪さんは僕の胸倉を掴んでガクガク揺する。脳みそがいい感じにシェイクされて、意識が飛びそうになった。気がつくと僕は必死に謝っていた。

「ごめっ、ホントごめん! 謝るから! 反省するから! だから

揺らさないでー!」

「もっとあたしに構ってよおー!」

駄目だ、聞こえてない! かくなる上はアルにつ、アルに助けを求めるしかないっ!!

「アルっ! 助け……………」

僕は絶句した。先ほどまでアルがいたところは、既にもぬけの殻に

なってしまうていたのだ。つまり、僕を助けられる人間は皆無……。

沙雪さんは相も変わらず、僕を揺すって、叫ぶ。

「扱いの改善を要求するうー！」

あ、なんかもう、意識を保つのが馬鹿らしくなってきた…………。

僕は沙雪さんの腕を揺りかごに、喚き声を子守歌に意識を手放したのだった。

第二十一話 緊急事態!?(後書き)

お久しぶりです。本当にお久しぶりです。この小説は実に5ヵ月ぶりの更新らしいです。

更新サボってすみません。待っていてくださった方は本当にありがとうございます。

今後はちまちま更新するので、是非よろしく願います。

第二十二話 真夜中の決闘

空は漆黒。大地には人の営みの灯り。冷たい風は骨の髄まで染み込み、人は他人に無関心に自分の家路をひたすら辿る。季節は秋も深いところまでに移っていた。

僕は肌寒い風に体を震わしながら、屋敷への帰途を急いでいた。

「沙雪さんもなあ、何もこんな寒い日に肉まん食べたがらなくても……」

まあ、寒い日だからこそ肉まんが食べたいのかもしれないけれど。そして、じゃんけんに負けた僕が悪いのだけど。やっぱり、一人だけ寒い思いをするのは間違っている気がする。

「ま、過ぎたことを言っても仕方ないか」

僕は右手に下げた肉まんの袋から熱を分けてもらい、気合いを入れ、気持ち早足で屋敷を目指した。

僕が住んでいる屋敷からコンビニまでの間に、公園がある。ブランコや滑り台、砂場などのメジャーな遊具と小さな広場があるだけの小さなものだ。コンビニに行くときは全く気にもかけなかったのだが、今は僕を強く惹きつけた。

僕は公園に引かれるように、ふらふらとその中へと入っていった。すると、公園の闇の向こうから何かが風を切る音が連続して聞こえてきた。僕はその音が何か、良く知っている。竹刀を素振りしている時の音だ。少し、素振りをしている人間に興味が湧く。僕は風を切る音を頼りに、公園の奥の方へと足を進めた。

少し歩いて見つけた人影。その人は一心不乱に竹刀を振るっている。変幻自在の剣筋と鮮やかなフットワークが、相手を想定した実践に近い素振りであることを容易に連想させた。

その舞とも言える剣は、僕の錆び付いた闘争心を燃え上がらせる

ようだ。

人影は飽きもせず、仮想の敵を打ちまくり、仮想の敵の剣をかわし続ける。と、人影の気配が劇的に変化する。殺気に近い剣呑な気配。人影は大きく振り被り、唐竹割りの要領で竹刀を振り下ろした。ゴォッ！

と、竹刀にしては有り得ない音が僕の耳まで届き、それによって起こった風が僕の頬を撫でた気がした。

素晴らしい。こんな逸材がこの町に眠っていたなんて。感動だ。

ぱちぱちぱち。

気が付くと僕は両手を打ち鳴らしていた。人影は僕に剣先を向け、威嚇するように叫ぶ。

「誰だっ！」

その声は美しいソプラノ。その上、聞いたことのある声だった。

「驚きだね。君がこれほどの実力をつけているとは、僕も見抜けなかったよ」

「その声は、滝川……朋？」

「うん。君とは奇妙な所で出会うね、里香」

暗がりからゆっくりとした足取りで姿を見せたのは最近よく関わりのある少女、里香だった。

僕の言葉を受けて、里香の表情が少々険しくなる。

「こんな夜更けのこんな場所で行っていた？」

「君こそ。こんな夜中まで修練かい？」

僕は質問を質問で返す。里香の顔はみるみるうちに赤くなり、剣先がかたかたと震えだした。

「質問しているのは私だっ！ はぐらかすな！」

「別に何をしているかなんてどうでも良いじゃないか。悪いことはしていないんだし」

僕はあくまで軽い調子で言葉を返す。里香の頭にまた血が上る。悪

循環。里香にとってみれば腹立たしいことこの上ないだろうが、僕にとっては愉快的な遊びだ。それに、今日は存分に竹刀を振るってみたい気分だった。

里香は激昂する。

「貴様っ！ やはり何か悪巧みをー」

「里香、今は深夜だよ。いくら公園でも大声は良くないと思うなあ」
「なっー」

里香は絶句し、ギリギリと歯を噛み締めた。僕は緩む頬を必死で引き締めつつ、きびすを返す。

「ま、無駄話も何だし、僕はもう帰ることにー」
「待て」

里香は僕を引き止めた。つまり、彼女は僕の策に嵌ったのだ。まあ、策と呼べる程上等なものでもないのだけど。

僕は里香をじらすように、ゆっくりと振り返った。

「どうしたの？僕はそろそろ帰りたいんだけど」

里香は無言で僕に棒状の何かを放る。僕は肉まんを放り出し、それを空中で上手くキャッチした。竹刀だ。

「立ち会え、滝川朋。やはりお前を叩きのめさないと私の気が済まん」

僕は竹刀の柄を握ったり開いたりして感触を確かめる。

「君に僕が叩きのめすことが出来るかな？」

「貴様ッ！」

里香は僕の用意も待たずに飛び出す。僕はそれを悠然と待ち構えた。初撃は突き。全突進力と全体重を剣先の一点に集約し、一撃の下に相手を沈めるであろう剛剣。

その練度の高さに僕は軽く目を見開き、しかし触れることなくひらりと避ける。

里香は突いた剣を引かず、そのまま風ぐ。これも避けねば必死。が、僕の想定範囲内であり首を少し下げるだけの動作でかわした。そこに出来る一瞬の隙。僕はそれを見逃す事無く、必殺のタイミグ

をもって竹刀を振るう。が、必殺の筈のそれを里香は紙一重でかわし、バックステップで間合いを取った。

「くっー！」

「ふうん。これに反応出来るのか……」

里香は歯をぎりど鳴らし、僕は感嘆の息をついた。傍目に見ると優劣は明らかかなように見えるだろうが、実を言うと実力は五分五分といったところだろう。それだけ僕が強がっているということだ。まづい。これは一氣に決めにかかるかー？

里香は先ほどの攻防で僕を過大評価したらしく、不用意に懷に飛び込むことをせず、じりじりと間合いを詰め始めた。

「君がそう来るんなら僕から攻めようか」

僕は笑みを浮かべて躊躇なく里香の間合いへと飛び込んでいった。

勝負は一瞬にして決した、とはいかなかったものの、ものの5、6合で決着がついた。今、僕の竹刀の先端は里香の首を捉えている。「なっ……！」

里香は未だに自分の身に起こったことを理解出来ていない。ただ、突きつけられた竹刀が敗北を告げていた。

「僕の勝ちだね」

僕は竹刀を下ろし、試合の終了を告げた。里香は呆然と立ち尽くす。

「一体、何をした？」

「何をと言われてもね。絶対に防げないタイミングを作り出して、それを逃さなかったっていうだけの話だよ」

僕は事も無げに言い放ち、里香に竹刀を返す。里香はそれを機械的に受け取った。

「それじゃ、僕はこれでお暇するよ。なかなか、楽しかったよ」

最後のは強がりだ。僕はくると後ろを向き、そのまま歩き出した。後ろでは里香が動かぬまま、ぼうっと立ち尽くしていた。

屋敷の玄関には沙雪さんが仁王立ちしていた。その顔は微妙にひきつっている。

「あれ、どうしたの沙雪さん？」

「朋。肉まんを買ってきたにしてはずいぶん遅かったね。その上何も持っていないようだし」

「……………あ」

忘れてた！　そういえば肉まん買いに行ってたんだ！！

沙雪さんの背後にはオーラが見える。それは錯覚だろうが、僕の目は確実に危険を訴えていた。

「さ、沙雪さん。ここは穩便に……」

「行ってきた」

「は？」

「もう一回行ってきてって言ってるの！」

「は、はい！」

「一分以内にね」

「そ、それは無茶……」

「つべこべ言わない！」

「すみません！　じゃあ行ってきまーすッ！！」

僕はもう一度寒空の下に飛び出したのだった。

第二十二話 真夜中の決闘（後書き）

10日以内の更新！　なんて久しぶりなんだ……。猫小判は微妙に興奮気味です。

さて、第二十二話はいかがだったでしょう。朋君と里香の実力の片鱗が垣間見えたことでしょう。これ、将来的にかなり重要になる気がします。心の片隅に留めておいてもらえると幸いです。

今後はシリアス方向に進みます。バトルとか謀略とかドロドロとか色々入り乱れます。コメディも忘れません……。多分。

更新は鈍亀ですが、今後もよろしく願います。感想書いていただけると更新の優先度が上がります（笑）

第二十三話 襲撃

昼でも薄暗い路地裏。その奥の少し広くなっている袋小路で、僕と滝川朋は絶対絶命の危機に晒されていた。

「僕に何か用ですか？」

僕は平静を装って、僕を取り囲む黒スーツを着たその筋の人達五、六人に問う。その中の一人、アゴヒゲを生やした中年男が僕の問いに答えた。

「ああ、気の毒だが。とある旦那の依頼でなあ、君をその方の屋敷まで連れてかなきゃならんのよ」

男の右手に握られた長ドスが光を反射してキラツと光った。僕は身震いをする。敵は全員がその手の人間な上に武装しており、僕は徒手空拳。圧倒的不利どころか、如何にしようと勝ち目が殆ど無い状況だった。

うちの義兄達の中の誰かの仕業なのだろうけど、これはやりすぎじゃあないか？ 抵抗したら僕、死んじゃうじゃん。ついて行けばついて行っただでロクな事にはならないだろうし。

僕がしばらく黙っていると、敵の中でも特に短気そうな男が痺れを切らしたように怒鳴る。

「だんまりかワレええええ！！ ナメた真似してっと、その女みてえな顔、ズタズタにすんぞ！！」

怖っ！ ヤクザの人怖っ！！

長物さえあれば、僕もどこかの物語の主人公みたいに大立ち回りをやってみるんだけど、長物が無いんじゃない。大人しくこいつらに付いていくしか…………、

『ニャ〜』

と、僕が諦めかけたそのとき、僕の目の前を黒猫が颯爽と横切って

行った。……あれは、アル？

「貴様等ッ！ いい大人が一人の学生脅して情けないとは思わないのかッ！！」

その黒猫に導かれて現れた人物は、

「貴様等のひん曲がった根性は私、奥寺里香が正してやるッ！！」
一人の阿呆……、もとい奥寺里香だった。というか名乗ってどうする。ヤクザに目をつけられたら大変だぞ？

ヒーローのように現れた里香に、ヤクザの人達は一瞬我を失い、

「ナメんなやゴラァッ！！」

気を取り直した瞬間、得物を構えて里香に飛びかかった。リーダーっぽい人を除いて。

あーあ、やっちゃった。こんな三下ヤクザ共では、竹刀を携えた里香にはかなうまい。これでめでたく里香はヤクザに追われるハメになり、僕は彼女に恩義を返さなくちゃあいけなくなるわけだ。全く、面倒臭い。

里香は不敵に笑み、竹刀を正眼に構えた。彼女が狙っているのは、おそらく喉元。どんな相手でも一撃で悶絶する急所だからだ。

里香は小さくため息をつく。

「つまらん。少しもなっていないではないか」

そう呟いて、動いた。いや、消えた。少なくとも僕の視界からは。そして簡抜入れずに、ぐしゃりと何かが潰れる音が連続で僕の耳に届いた。続いてドサドサと人がコンクリートの地面に倒れる音。里香はどうやら全員を殆ど一瞬で葬ったらしい。

「ふむ。これで二対一となったが、どうする？」

里香は残ったリーダーの人に木刀の切っ先を向けた。リーダーの人は肩をすくめておどけて話し出し、

「嬢ちゃんにはまいったな。これでこの仕事は失敗になっちゃったわけだけど」

極悪な笑みを浮かべる。

「だがな、ヤクザってやつはナメられたら終わりだからよ。……」

覚えとけよ」

ヤクザのリーダーの人はそう吐き捨てて、下っ端たちを蹴り起こして去っていった。

「さて、君。これでだいじょ……って滝川朋！」

里香は今更気が付いたのか目を剥いて驚き、あからさまに舌打ちする。

「ちっ、お前なら助けは必要なかったな。余計な世話だった」

「いやいや、助かったよ。ありがとう」

僕が素直に礼を言くと、里香は詐欺師を見るようなじと目で俺を見た。

「…………お前が素直に礼を言くと、胡散臭いな」

「心外だなあ。僕だって礼を言うべきときは礼を言うさ」

僕はおどけた調子で話す。心が少しだけ傷ついたのは秘密だ。

里香は、ふんと鼻を鳴らしてきびすを返した。

「どこまでが本心なのだか。ではな」

「いや、ちょっと待って。君が用が無くても僕は用がある」

僕は去っていくこうとする里香を慌てて引き止めた。里香は嫌そうにゆっくりと振り向いた。

「…………なんだ？」

「君が打ち倒した相手のことは分かってるかい？」

「ヤクザだろう？　それがどうかしたか？」

里香は至って平然と言う。まあ、一般人にはこの程度の認識か。その上、さっき楽に倒したとなると尚更、だな。

「君はヤクザの恐ろしさを知らなすぎるよ。彼らは言わば恐怖と暴力のプロだ。恐怖の目を向けられる為には何でもするんだ。それが法律的に極刑に繋がることでも、ね」

「ふうん？」

里香はイマイチ納得の行かないというか理解が及ばないというような表情で首を傾げた。やっぱり口じゃ分からないか。それなら………

「アル。頼むよ」

僕は里香の背後の闇へと声をかけた。

「分かりました。魔王様」

「っ!？」

里香は背後に唐突に現れた気配と声に反応し、素早く飛び退く。が、

「失礼します」

アルが右手のハンカチを里香の口と鼻に押し当てての方が早い。それに染み込まされた薬品を思い切り吸い込んだだろう里香は、気を失ってアルの腕の中へと倒れ込んだ。

「ってクロロホルム!？ それって後遺症が残るんじゃない無かった!？」

「いえ、適量であれば大丈夫です。それよりこの少女は屋敷に運んでおきますか？」

「いや、里香は僕が連れて行く。それよりアルは……」

僕は里香のポケットの中を漁って生徒手帳を探し出し、それをアルに渡した。

「里香の姉、美里を保護して来てくれ」

「承知いたしました」

アルは生徒手帳を受け取ると、颯爽とその姿を消した。

僕はため息をつく。

「計らずとも全面戦争ってことになっちゃったけど……」

僕にとっては好都合だ。血縁だからといって容赦するつもりも全く無い。

「僕に手を出したことを後悔させてあげるよ、兄さん達……」

僕はこみ上げてくる暗い衝動に身を任せ、高らかに笑った。

第二十三話 襲撃（後書き）

注）作者はクロロホルムについて全く知りません。ぶっちゃけイメージでしか書いていないので、話を上手く進める為のアイテムだと思ってください。

というわけで第二十三話でした。お話も佳境に入り、シリアス要素の増加に伴いコメディ要素が減少するといった、コメディ屋として少し面白くない事態が発生しています。なんとかコメディ方向へ持っていくけいかなあ。

ところでこの作品、そろそろ打ち切ります。壮絶なる兄弟喧嘩編の終了（おそらくあと2〜3話）あたりが一番区切りが良いかなあ、と思ったり思わなかったりしたので。

次の更新がいつになるかわかりませんが最後まで根気よくお付き合いくださいと嬉しいです。

第二十四話 魔王様とはーれむ

「魔王様」

「どうしたんだい？」

猫形態のアルは僕のベッドの上にちょこんと座って僕を見上げていた。僕はすらすらと走らせていたペンを止めてアルに向き直る。

「今の状況を一言で表すとするならどのような言葉が適していると思いますか？」

「はぁ？ どうしたの、藪から棒に」

アルが言っていることの意図がイマイチ良く掴めない。

そうだな……。兄さんに喧嘩を売ったはいいけど、何も仕掛けられないし、そもそも屋敷から出られないこの状況を一言であらわすなら、

“手詰まり”

これが妥当かな。

そう結論付けた僕が口を開く前に、先にアルが口を開く。ところでアルは猫の声帯でどうやって人語を操っているんだろう？

「何か気づきませんか？ この屋敷には、沙雪、美里様、里香様の三人の女性がいますよ」

「？ まあそうだね」

アルの言っていることは良く分からない。というより何時もと違う気がするの僕だけだろうか？ なんだかそわそわしているような

ウキウキしているような…………。

「自覚は無いということですね？」

「ていうか何が言いたいのさ？」

「では、率直に申し上げます。この状況、確かに小規模ながら権力を持つ者のステータスであるハーレムであるということを言いたかったのです！ 魔王様。魔王様にも遂に魔王としての在り方に目覚めたのですね！！」

……………はい？ 今、アル君はなんと言いました？

いや、聞き間違いだね。

「で」

「素晴らしいです！ 私、200年振りぐらいで感動しております！」

アルは踊り出しそうな勢いだ。

……………遂に壊れちゃったのかな？

「アル、正気？」

「ええ、正気ですよ正気ですとも！ 遂に魔王様が魔王様らしいことをなさったのです。今日は赤飯を用意せねば！」

駄目だ。目が逝ってる。ていうか何処がハーレムなのさ？

「あのねえアル。彼女らは僕のお手つきではないし、その予定さえないのに、それはおかしいでしょ？」

「……………腰抜け魔王様」

アルは舌打ちをして暴言を吐く。

「そういえば魔王様はヘタレでしたね、ええ。期待した私が愚かでした。それでは」

「ちよっと、アル！」

アルは言いたいだけ言って雷光のような素早さで部屋から出て行った。

最近、アルの態度が悪いのはどうしてだろう？ ……調教が必要、かな。

そうやって意図的に黒い笑みを浮かべていると、アルが逃げ去ったまま半開きだった部屋の扉が勢いよく開いた。里香だ。

「滝川朋っ！ 貴様、私をこんなところに連れこんで何を企んでいるっ！」

「何をつて、ねえ？」

黒い笑みを浮かべたまま流し目をしてやる。里香は後退りするが、ぐっと気合いを入れて食ってかかっていた。

「答えろっ！」

「……あのね。君がぶちのめした相手のこと、覚えてる？」

「ん？ あの黒服共のことか？」

里香は何でもないことのように言う。これだから素人は……。

「あれが問題でね。彼らは本職の方々なんだよ。君の身が危ない」

「何故だ？ 復讐に来るなら返り討ちにするだけだ。手応えは皆無だったし」

「それは不意を突かれたからだよ。彼らが本気になれば銃くらいは平気で使ってくる。それでも大丈夫だって言うなら僕はもう関与し

ないけど、そうじゃないなら僕に任せて欲しいんだ」

里香は青い顔で僕を見る。いかに里香といえど、所詮はアマチュアだと言うことだね。

「わ、分かった。し、しかしお前は大丈夫なのか？」

僕は笑う。自虐的な嘲笑。

「適材適所、だよ。こういうことに慣れてる僕に任せてほしい」
「それはどういう……」

「朋く〜ん！　ようやくわたしの良さが解ったのね〜！　お姉さん嬉しい！！」

「ごふうっ！？」

絶叫に似た歓喜の声。腹部への強烈な打撃。一瞬、意識が飛びかける程の見事なタックルだった。

というか、気配が完全に読めないという異常事態だった。美里さん………侮れん。

「姉、さん？　どうしてここに？」

「うん。沙雪ちゃんから朋くんと結婚しないかってお誘いを受けたから」

「…………え？　た、滝川朋、貴様…………」

「違うよ！　美里さんはナチュラルに嘘つかないでください！」

僕がすかさず否定すると、美里さんはしなを作り潤んだ瞳で僕を見上げた。

「そんな…………。あの時わたしを傷物にしておいて…………」

「ちよっ…………、そんな口から出任せの嘘が良くスラスラ出てくるもんですね！ あ、あの、さ、里香さん？ 落ちついて…………」

何やら自分の爪先をにらみ殺すように見つめ、ギリギリと拳を握り締める里香。背後には燃え上がる炎のようなオーラが。誰に見えなくても僕には見える。

ヤバいと思ったのか、美里さんはいつの間にか僕から離れていつの間にか里香側についていた。

「滝川朋…………」

「は、はひっ!？」

ヤバい。声が裏返ってる。恐怖で体が動かない。蛇に睨まれたカエルだ。

里香は限界まで握り締めた拳を、最大の破壊力が得られる形に当てはめた。

「姉さんに手を出すなど言ったらろおおおっ!!」

ごうという風切り音と共に放たれる凶拳。僕は避けることもせず甘んじて受ける。

「ぐはあっ!」

僕の意識はブラウン管のテレビのようにぶつりと切れた。

第二十四話 魔王様とはーれむ（後書き）

約1年ぶりの更新です。

お久しぶりの方も初めましての方も読んでくださってありがとうございます。
ございました。

今後は定期更新を目指して頑張りますので、よろしくお願いします。

評価や感想は作者のやる気に直結いたします。是非一言残していただければ幸いです。

第二十五話 連載再開したしテコ入れしてみるか！

「失礼します魔王様」

僕がベッドに寝そべって『我が闘争』（原文）を読んでいると、いつものようにノックの音が二回して部屋のドアを開いた。ちらりと目そちらに目をやる。……珍しい。人間形態のアルだ。

「どうしたんだい？ 見ての通り、僕は読書で忙しいんだ。重要度の低い案件なら後にしてくれないかな？」

「いえ、それが重要な案件でございます。それと魔王様。伍長殿の著書はあまりお読みにならない方が宜しいかと」

「？ どうして」

「彼の伍長殿のせいでヨーロッパ中の人外の者の多くが弾圧を受け、殺されました。今でも憎んでいるものは多く、反感を買いますよ」

「そうなのかい？ それなら隠れて読むことにするよ」

僕は区切りのいいところで切り上げ、葉を挟む。本は適当にベッドの下に仕舞った。

僕はゆっくり起き上がり、仕事机に着く。

「それで、重要な案件って言うのは？」

「はい。かねてより魔王様が要請していた援軍が到着致しました」

「本当か！？」

あれだけ僕の要請を拒否していたアルが既に手を回していたとは意外だった。というかどうして援軍を呼んだのだろうか？

「あれだけ反対していたのに、意外だね。どういう風の吹き回しな

の？」

アルは軽く顎を撫でて目を細めた。

「いえ。連載も長らく中断していたことですし、ここは新キャラを追加してテコ入れしようと思ったまでです」

「……………は？ 連載？ テコ入れ？」

「魔王様は知らなくて良いことです」

「そうか？」

アルは時々意味不明なことを言う。いつも僕には関わりの無いことだとはぐらかしてばかりだ。が、別にそれが不便という訳ではないから気にしないことにしている。

それより援軍だ。どれだけの兵力が得られたのか、どんな猛者たちがいるのか気になって仕方が無い。

「アル、援軍の規模は？ 構成する種族はどうなんだい？」

「増援の規模は1。構成する種族は……………説明が少々面倒なのでここに連れて参ります」

アルはそれだけいって部屋を後にした。……………増援1？ えーと、一個中隊ってことかな？

それに連れて来るって……………隊長をもって意味だよね？

何やら望まない未来が現実感を持ってこっちにダッシュで向かってきているように感じるのは気のせいだろうか？

僕は嫌な予感を払拭するために、仕事机の冷蔵機能を搭載した引き出しに秘蔵しているチョコレート（ゴディバ）の袋を開けた。冷蔵機能が不調なのかぐにやぐにやに変形している。

「不吉だ……………」

嫌な予感は更に増大した。

僕が仕方無く変形したゴディバを食べていると、ノックの音が部屋に響いた。

「失礼します」

いつものように僕の返事を待たずにアルが部屋に入ってきた。やはり人間形態である。その傍らには小柄な少年――背格好から12歳前後だと想像できる――が両目を閉じたままの無表情で立っていた。他に人影は見えない。

「アル、もしかしてその子が……………」

「はい。彼、三乃木疾風さんのぎはやてさんが今回の援軍です」

悪い予感は得てして的中するものだ。

僕は肩を落とした。

「援軍って……………、やっぱり一人？」

「ええ、当然です。たかだか夜討ちに正規軍は必要ありませんし、そもそも彼の能力なら一人で必要十分です」

「ふーん……………」

正直、頼りなかった。身長は低ければ体格も十人並。そこらにいる少年と変わらないように見えるからだ。僕が露骨にじろじろ疾風を観察していると、疾風はうっとおしそうに顔をしかめた。

「……………値踏みされるのは……………嫌い……………」

蚊が鳴くような小さな声。それが疾風の声だと気づくのには数瞬を要し、気付いて戦慄を覚えた。

疾風は僕に会ってから一度も目を開いていないのに僕の行動を咎めたのだ。疾風は見えている。目では見えない何かが。

「不快な思いをさせたのなら謝るよ。でも、作戦を立案して指揮をする者としては君の能力を把握しなきゃならないんだ」

「……………それなら……………体験するのが……………一番……………」

「!? 止めなさい疾風っ!」

アルが制止するよりも早く、疾風の額に第三の目が出現した。それと目があった途端に、僕の体は自由を失い、意識は強制的に無限の暗闇に落とされていった。

「自分の能力……………これ……………」

いや、意識はあるらしい。証拠に疾風の声が聞こえる。能力なのか分からなかったので問おうとするが、声が出ない。いや、それどころか口が動いている感触が無い。

「魔王様、疾風の能力は相手の五感の乗っ取りです」

「魔王様の……………触覚と味覚、視覚、嗅覚を……………もらった……………」

それって全部じゃんか。幼い容姿の割にエグいことするなあ。

それよりこの状態、非常に気持ち悪い。死ねない体になって宇宙空間に放り出されたらこんな気分がするのだろうか？

「ほら、疾風。魔王様の感覚をお返ししてください」

「……………わかった……………」

そんな会話が聞こえた次の瞬間、急に重力が僕を襲った。さっきまで何も感じていなかった脳では対応は不可能で、僕は尻餅についてしまう。

「いや、うん。凄い能力だね。空気の匂いとか重力が気持ち悪いって感じられるなんて貴重な体験だったよ」

ありがとう、と僕が皮肉半分で言う。と疾風は律儀にどういたしましてと返してきた。肩の力が抜ける。

「疾風、君は自分の部屋に戻ってゆっくりして。君の家は今日からココだから」

僕がそう言うと、疾風は全く感情の読めない表情で一礼し、部屋を後にした。

「如何です？ 満足いただけましたでしょうか」

「満足だよ。直ぐにでも兄さん達とケリをつけられそうだ」

僕はくつくつと笑う。愉快で仕方が無い。まだ気持ちは悪いが。

「ではいつ頃に作戦開始と致しますか？」

「そうだねえ、うん。二週間後の土曜日までに全員の準備を完了させておいて。方々への根回しも」

「はい。承りました。それでは失礼します」

アルは一礼して部屋を後にした。疾風と違って悪い笑みを浮かべて。僕は机に仕舞っておいた我が闘争とおやつを取り出す。さて、ア

ルも居なくなつたことだし、伍長殿の主張でも考察しよう。

第二十五話 連載再開したしテコ入れしてみるか! (後書き)

公約を早速破って13日目の更新です。僕の努力目標を鵜呑みにしたみなさん。本当に申し訳ない。

そして謝っておきます。新連載を始めるので更新が更に遅くなr
最悪2週間に一回は更新したいので、見捨てないでくださるとうれ
しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735a/>

凡人魔王様の苦難の日々

2010年11月25日02時55分発行